



# 社団法人日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2008



日本環境教育フォーラム20周年記念出版

---

# 目次

---

開催趣意	1
スケジュール	2
開会式・1日目全体会	3
開会挨拶	4
報告「日本の自然観を次世代に伝えるワークショップ」	5
講演「日本の環境教育はどこにいるか」	6
講演「地球環境と世界の森林」	7
講演「自然保護運動の流れから日本の環境教育を見る」	8
講演「国際協力からみた環境教育」	9
講演「輸入型(?)環境教育と日本型環境教育」	10
講演「多彩に発展してきた自然体験型の環境教育」	11
2日目ワークショップ	13
2日目夜 JEEFの集い	33
オプションプログラム	39
3日目全体会・閉会式	47
テーマ別「今後の戦略会議」報告	48
閉会挨拶	51

# 開 催 趣 意

---

ますます深刻になりつつある環境問題を解決する取り組みの一環として環境教育があります。環境問題を解決し、住みやすい社会にしていくためには、まず、諸問題を知り、気づき、関心を持ち、問題意識を共有することが大切です。

そして、自然はさまざまな分野と密接につながっていることから、それぞれの分野に携わる人と人（または団体）がつながりを持ち、共に手を携えていくことが必要です。

全国各地から研究・教育・行政・企業・NGO・NPOなど環境教育の現場で働く人々同士のつながり＝ネットワークを大切にし、継続的に育んでいくことが社会を動かしていく力の源になると考えております。

そのために、お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的として、このミーティングを開催いたします。

## 特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者の皆様が“主役”であることです。

どんなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体で作り上げていくという性格を持っています。

## テーマ

このミーティングは、主に下記の2点を全体のテーマとしています。

1. 参加者同士のネットワークの構築
2. それぞれの環境教育活動を再確認し、理念や意識を共有する場  
～人と人、思いと思いが出会うことで、新しいことが動きはじめます～

## 今年の特徴

今年のテーマ：「日本型環境教育の知恵 出版記念」～日本型環境教育とは～

2008年9月に日本環境教育フォーラム20周年を記念して、記念誌『日本型環境教育の知恵』を出版します。1980年代、日本で環境教育が始まった当時は、アメリカ経由で入ってきた環境教育(特に参加体験型)を日本にどう広めるか？日本人にマッチさせるにはどうしたらいいか？ということを考えての「日本型環境教育」の提案でした。それから20数年、今の時代に求められる、期待される「日本型環境教育」とはどんなものがあるのか、皆さんで考え、探ってみてほしいと思います。

「環境教育プレゼンテーション」では、たっぷり時間をとって、皆様から活動の最新情報を発表していただきます。各地で環境教育を実施している企業や行政や自然学校の中で、今何を最も大事な環境教育のテーマとしているのか、どんな課題、新しい挑戦があるのかを発表しあい、共有しましょう。

そして、それぞれの活動を理解し、刺激を受け合いながら、これからの環境教育活動につなげていただきたいと思います。

また、自然体験型の環境教育プログラムの体験ネットワークづくりのために、イベントを行います。

---

# スケジュール

---

## 1日目：11月15日(土)

10:30～	受付開始
11:30～12:15	ちょっと早めに到着された方のための先取り交流企画(自由参加)
13:00～15:00	開会式 全体会「日本型環境教育の知恵 出版記念」～日本型環境教育とは～ ワークショップ報告(山田俊行氏) 講演(阿部治・稲本正・小河原孝生・草野孝久氏・西村仁志氏・広瀬敏通)
15:00～15:45	休憩・チェックイン
15:45～18:15	環境教育プレゼンテーション
18:30～20:00	夕食
20:30～22:30	環境教育プレゼンテーション 情報交換会
21:30～22:30	JEEF 理事の何でも相談所

## 2日目：11月16日(日)

7:00～8:00	早朝ワークショップ(自由参加)
7:30～8:30	朝食
8:30～9:00	休憩・移動
9:00～12:00	3時間ワークショップ
12:00～13:30	昼食・休憩
13:30～16:30	3時間ワークショップ
16:30～17:15	休憩・移動
17:15～18:15	JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
18:30～20:00	夕食
20:00～22:30	環境教育プレゼンテーション JEEF 理事の何でも相談所 情報交換会

## 3日目：11月17日(月)

7:00～8:00	早朝ワークショップ(自由参加)
7:30～8:30	朝食
8:30～9:00	チェックアウト
9:00～11:30	テーマ別 今後の戦略会議
11:45～12:30	全体会・閉会式 テーマ別 今後の戦略会議報告 閉会挨拶
13:00～14:00	さよならパーティ

---

# 1 日目

## 開会式・全体会

---

### 開会式

司 会 : (社)日本環境教育フォーラム理事 河原塚達樹

開会挨拶 : (社)日本環境教育フォーラム会長 北野日出男

### 全体会

テーマ「日本型環境教育の知恵 出版記念」～日本型環境教育とは～

司 会 : (社)日本環境教育フォーラム専務理事 川嶋 直

#### < 報告・講演 >

日本的自然観を次世代へ伝えるワークショップ報告 トヨタ白川郷自然学校 山田俊行氏

日本の環境教育はどこにいるか (社)日本環境教育フォーラム理事 阿部 治

地球環境と世界の森林 (社)日本環境教育フォーラム常務理事 稲本 正

自然保護運動の流れから日本の環境教育を見る (社)日本環境教育フォーラム理事 小河原孝生

国際協力からみた環境教育 JICA 地球ひろば 所長 草野孝久氏

輸入型(?)環境教育と日本型環境教育 同志社大学大学院総合政策科学研究科 西村仁志氏

多彩に発展してきた自然体験型の環境教育 (社)日本環境教育フォーラム理事 広瀬敏通

# 開会挨拶

(社)日本環境教育フォーラム会長 北野日出男

皆さん、こんにちは。清里ミーティング 2008 によろこそお越し下さいました。

JICA 地球ひろば所長の草野孝久さんにゲストとしてお越しいただき、ご多忙の中ありがとうございます。また、ご後援いただいています各省庁、山梨県、日本環境教育学会に御礼申し上げます。なにより、毎年のことですが、宿泊や身の回りのお世話など様々な運営を引き受けて下さっている財団法人キープ協会、山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターのスタッフの皆様に厚く御礼申し上げます。

開会の挨拶は短めにと言われておりますが、どうしても話しておきたいことがあります。

これはいつ我が身にも起こるかもしれない地震災害の話です。私達の仲間であるくりこま高原自然学校が被災しました。地球のこども 10 月号に代表の佐々木豊志さんが書いておられますが、『2008 年 6 月 14 日 8:43。あの一瞬から多くの人たちの人生が変わった。岩手・宮城内陸地震のほぼ震源域にあるくりこま高原自然学校も一変した。』……大変なことだと思います。

この中で非常に元気づけてあることも書いてあります。『今回の地震で失ったものもたくさんあるが、それ以上に得たものもたくさんある。そして、新しい環境の中でくりこま高原自然学校の地域での新しい取り組みも始まった。』

この取り組みは、私たちが生きるうえでも、非常に大きな力を与えてくれるものとなることを信じています。頑張れという言葉は他人事のようにあまり好きではありませんが、頑張れる時に頑張ってください、と申し上げたいです。



今年の全体会テーマは、JEEF がこの秋出版した「日本型環境教育の知恵」です。ぜひぜひご購読いただきたいと思います。この本を生み出すまでに様々なことがありました。まずは、本書を刊行するうえで大変なお力添えをいただいた、(株)小学館の相賀昌宏社長、(財)日本児童教育振興財団、(株)小学館クリエイティブの上野明雄さん・川村寛さん・竹形徂弘さんに厚く御礼申し上げます。

竹形さんにはこの会場にもお越しいただいておりますが、しっかりとした編集スケジュール管理をし、執筆の遅れを励まして下さいました。同志社大学の西村仁志さんには、インタビューなどのテープおこしをしていただき、全体の構成に深く関わって下さいました。JEEF 事務局の佐々木恵子さんは様々な編集の雑事をしっかりと束ねて下さいました。これらの方たちには、編集委員長として改めて御礼を申し上げます。

この 2 泊 3 日、さまざまな方たちと出会い、学びのお土産としてお持ち帰りいただき、これからの活動にお役立ていただければ嬉しく思います。

# 司会

(社)日本環境教育フォーラム理事 河原塚達樹

このミーティングは、1987 年に『清里フォーラム』として始まりました。翌年から『清里環境教育フォーラム』として開催されるようになり、1992 年に日本環境教育フォーラムができてから『清里ミーティング』と呼ばれるようになりました。1987 年の 1 回目から数えて今回で通算 22 回目の開催となります。

3 日間というのは長いようであっという間に過ぎてしまうと思います。

JEEF 理事・主催事務局は、現地開催事務局であるキープ協会の方々と共に皆様方のよりよい交流が行われるように、スタッフ一同頑張りますので、今年もこの場から多くのコラボレーションが生まれることを期待しております。



# 全体会 「日本型環境教育の知恵 出版記念」

## ～ 日本型環境教育とは ～

司会

(社)日本環境教育フォーラム専務理事 川嶋 直

「日本型環境教育の知恵」という本が今年の秋に出版されました。今日の全体会では、その出版を記念しまして、日本型環境教育とは？ということをもう一度考えてみたいという全体テーマです。

「日本型環境教育の提案」という本が1992年小学館から発行されました。その時点では清里環境教育フォーラム実行委員会編となっております。そして「日本型環境教育の知恵」という本は

1987年にここで清里フォーラムを始めてから20数年経ったということで、僕らが新たに書き起こした本です。

どなたか一人のスピーカーでいこうかなとも考えたのですが、短い時間ですが少し頑張って、たくさんの方からお話をいただこうと思います。1人の方から報告、6人の方から発表という形で考えております。

## 日本の自然観を次世代に伝えるワークショップ報告

トヨタ白川郷自然学校 山田俊行氏

日本の自然観を次世代に伝えるワークショップを実施しましたので、その報告をします。日程は10月4日～6日の2泊3日、参加者44名、実行委員会形式で企画・運営しました。実行委員会には、大阪で日本型環境教育あるいは日本の自然観実践研究を頑張っているチームがい



ましたので、そこと一緒に行いました。田中利男さん、新田章伸さん、村雲和裕さん、八尾哲史さん、私というメンバーでした。

基調講演では、菅井啓之先生(京都ノートルダム女子大学教授)からこんなお話がありました。「日本人は多様で変化に富む自然に囲まれているので、その自然観も『多様性』や『あいまいさ』がキーワードになる。」続いて、菅井先生が実際に日本の自然観というものをどのように自然観察会で伝えているのか体験してみました。そこでは「全体を見ること、そして『いのち』を見ること、それが日本の自然観の大事な要素です。」

次に、ゲストの湊秋作先生((財)キープ協会やまねミュージアム館長)、菅井先生、栗谷本征二さん(栗くり工房主宰)に鼎談をしていただきました。そこでは、「日本人は春夏秋冬を感じる。田も神様だ。」「日本のとは多様性のことだ。よくわからないが、良い。」「見方を変えると生命が映えてくる。」といったお話。

それから、4つの分科会を行いました。

### 1 「もっとよく日本の自然観を考える」

日本的、日本の自然観、とはどういうことなのか、についてさらに突き詰めて考えるワークショップでした。

### 2 「日本の自然観を生物多様性との関係で見ると何がみえるか？」

柳田邦男さんが昭和5年に編集した日本の昔話を全員で読んで、生きものをピックアップして、どのくらい生きものが出てくるか、生物多様性と日本の自然観の視点を絡めた作業を行いました。

### 3 「農山漁村の持つ『力』と日本の自然観との関係」

日本の農村の魅力はその暮らしの中にあるということ、農山漁村の課題から日本的な要素をピックアップする作業を行いました。

### 4 「白川郷の『日本的』を巡るエコツアー」

日本を代表する日本的な自然『白山』の麓と白川郷を散策して、日本的な自然というものを見ていこうということを行いました。

最後に全体会で、「今、敢えて一言で日本の自然観を表現するとどうなりますか？」を皆さんにして、ふりかえりました。

来年度も行う予定にしております。理論と実践の両立を目指すということで頑張っております。日本的なのか、日本型なのか、日本の自然観なのか、日本型環境教育なのか、そういうキーワードにこだわっていこうと思っています。そのキーワードに何かしらの可能性があるのではないかと感じる人が、さらにやる気になる場づくりをするのがこのワークショップのねらいです。気になった方はぜひお問合せいただければと思います。



# 日本の環境教育はどこにいるか

(社)日本環境教育フォーラム理事 阿部 治

## 欧米から学んだ日本の環境教育

今回は日本の環境教育はどのようなかということについてお話します。私共は日本型環境教育をやってきたわけですが、実際その日本型といったときには、これは欧米・アジア含めて外国を意識してきました。日本の環境教育のルーツは公害教育と自然保護教育にあると思います。

環境教育という言葉が入ってきた1970年代、アメリカの環境教育法、国連人間環境会議での勧告を受けて、日本に環境教育という言葉が紹介され始めました。これ以降は、日本にどう環境教育を広げていくかということが一つの課題になってきました。その中で欧米の環境教育から学んできたことがかなりあります。例えば、JEEFは20年前の1988年にできました。同じ様な環境教育の連合体がイギリスでは1968年にでき、アメリカでは環境教育誌が出て、ヨーロッパの多くの国々に同じ様な動きが始まりました。

このようなことを考えると、日本の環境教育のルーツである公害教育と自然保護教育は1960年代に始まり、環境教育は欧米から20年遅れて始まったということです。そのために環境教育に関連する施設やプログラムは、欧米の方が非常に進んでいました。特にアメリカ、ドイツ、イギリスといった国々では自然系博物館、国立公園における環境教育施設や、環境教育の様々な指導者養成やプログラムが展開されていました。

そのような中で私共は、アメリカの自然学校などを見ながら、日本にどう導入するかということをしてきました。この20年の間に日本の環境教育施設は、自然系博物館、自然公園における施設、身近な環境教育施設など、欧米に伍するあるいはそれ以上のものができてきている状況にあります。制度としても2003年に環境教育推進法ができ、欧米以上にできていると思います。この影響を受けて韓国・台湾でも同じような制度を作りつつあります。

## 日本の成功例

そのような動きの中で、日本の成功事例としていくつかのものが挙げられます。欧米の模倣的なものと同時に、日本の成功事例として私がこれは欧米にはないと言えるのは、情報交流施設です。例えばGEIC(地球環境パートナーシッププラザ)のような環境省が作った全国7箇所にある施設です。あるいは、こどもエコクラブなどのようなシステムです。

## 日本の特徴

欧米とは違う日本の特徴としては、非常に総合的に取り組んでいるという点です。環境教育推進法では、環境省だけでなく、文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省の5省が連携しています。自然学校では、地域づくりの主役を担っている自然学校は欧米にはほとんど見られません。日本の自然学校は地域の歴史や文化、資源、産業と連携しながら行われています。日本だけ

でなくアジアではそういったケースがよくみられます。さらには田んぼの学校も、田んぼという自然から生まれる文化、社会的なつながりを含めた総合的な環境教育だと思います。

そこからESDというもの、環境教育の発展形として様々な分野が繋がっていく中で1980年代に出されたものです。

これは狭い意味での環境教育

から広義の環境教育で、JEEFが言っている「人と自然」「人と人」「人と社会」の関係性の改善を通じて持続可能な社会を作っていく、それがESDですが、そのような視点で国際的に発展してきた。それを具体化していくために国連の10年を2002年ヨハネスブルグサミットで日本が提案した、国際的な取り組みとして始まっています。ESDの視点から見た場合も、リード国は日本、ドイツ、スウェーデンですが、ドイツとスウェーデンはESDといっても担当省(教育省)の一部しかやっていなくて、多くは学校での活動です。大きな課題なのですが、非常に狭い活動です。日本の場合は文部科学省だけでなく、環境省、他の省庁などの行政、NGOも企業も頑張っています。日本のESD的な取り組みは、まさに総合的な環境教育の取り組みだと思います。

日本の環境教育では、どうして総合的な取り組みができるのだろうか？そこに日本型環境教育のひとつの特徴、あるいはそれを探るヒントがあるのではないかと思います。つまりそういった国民性、トップダウンが入りやすい、といったことがたぶん日本ではあるのではないだろうかと思いますが、そこから展開していくことが必要ではないだろうか、と思います。

## 日本から学ぶ韓国・台湾

日本の動きというものを見て、韓国や台湾では、日本が欧米から学んでつくってきたような施設を、日本から学んでつくっています。制度についても、日本と同じようなものをつくろうとしています。

韓国・台湾だけでなく、多くの諸国に日本の経験を伝える際には、公害教育も含めた日本の環境問題の経験を併せて伝えていくことが、意味があるのではないかと思います。





# 地球環境と世界の森林

(社)日本環境教育フォーラム常務理事 稲本 正

自然(しぜん)という言葉の定義は、英語の nature では人間は含んでいません。人間は自然の一部だ、と思う人は自然(じねん)だと思っているということです。ヨーロッパでは1つの神(絶対神)があり、その下に理性があり、理性以外の人間性、人間以外の生物を含む自然、と分けていました。近代になって、環境問題の一番の犯人はデカルト、ニュートンです。彼らは、神に代わって理性こそが一番だと言うわけです。サルと人間は全く違うと言っていますが、遺伝子的には97%同じです。近代合理主義は、自然という所謂ヒエラルキーを作ったわけです。ヨーロッパでは人間が自然を保護すると思っています。ところが日本人はそう思っていないで、基本的な概念に"じねん"があって、いろいろなものをぐちゃぐちゃに混ぜて、それが相互に関わっていると思っています。これが良くないことだと一時は言われていました。ところが意外と良いことだったんです。

近代合理主義でやってきたことの結果が何かというと、CO2 量の上昇になっています。私が大学を辞めたのは、ハワイのマウナ・ロア観測所で350ppmを記録した瞬間、これはダメだと思いました。自然を完全にコントロールして、地下資源を採って、結果的にCO2を出したわけです。過去40万年は180ppm~280ppmだったのに、今は390ppm~400ppm以上になっています。

IPCC のパチャウリ議長が意外にも、日本型環境教育を評価しているんです。この会のテーマに日本型環境教育とは何か?とありますが、僕の答えは『世界に日本が発信すべき環境教育』です。

CO2 の排出量では、アメリカが国としても個人としても圧倒的に多いです。中国・インドがアメリカ並みになったら、地球がいくつあっても足りないです。近代合理主義の結果をどう克服するかというのは、日本型環境教育です。人間が呼吸するだけで木が16本必要で、日本の文明的な生活をするだけで木が376本必要で、これを植えなければいけない。インドでは平均的生活なら44本、アメリカ人は約800本必要になるわけです。オバマ政権になって、これを半分以上にしなければならぬと言っています。

日本国内の森林による吸収率はあまり知られていませんが、3.8%あります。今、日本の経済の問題は内需が拡大していないということ。木材はあり余っているのに、8割も輸入している。森林の手入れさえすれば、日本は自給率7割くらいまでもっていただけます。日本人は原生林を少なくして、わずか2.3%しか残っていない。約41%の人工林と50%以上の二次林は全て手を入れなければいけないわけです。

日本型環境教育のいいところはいくつかあります。最近、漁師が山に木を植え始めた、これこそが日本型環境教育だと思う。海と山をつないでフィールドをつないだ。やはりこういうことをやらなければいけない。それから日本のアーティストの坂本龍一が more Trees という企画で、オーガニックコットンの5,000円のT

シャツを出したら、3,500万円儲かったんです。それをフィリピンと国内の森林に向けています。手を入れるとどうなるかという、ドングリの会の例でいくと、たった8年で見違えるようになるわけです。ということは手を入れると日本の森林はものすごくよくなります。これは平安、江戸の時代から水田も含めて、それくらいの技術を持っているということ。それをあまり評価しなかったのですが、これで環境がダメになった。日本人は理論ではだめなんですよ、理論はヒエラルキーですから。何で納得するかというと、腑に落ちて初めて納得します。それが意外と途上国につながるんです。

地球は今、世界的にもものすごく崩壊しています。これを手直し、リハビリテーションしなければいけない。その時に日本人が過去に手直ししてきたノウハウがものすごく生きるんです。

もう一つ、日本は循環型社会だったわけです。自然素材を生活に使って、それを大切に使うことによって木を植える、そうするとCO2はどんどん減るんです。欧米型の化石資源というのは、CO2はどんどん増えます。だから、日本のこういう生活のスタイルも含めて輸出すべきだと思っています。

環境教育をやっている味方が近くにいないと感じることがあると思いますが、イノヴェーター(発案者)って少ないにきまっています。それをつなぐ人(アーリーアダプター)がアーリーマジョリティ(初期多数追随者)にまでつながったときにワーストといくんです。これが2012年までいけるかどうか完全に地球を支配します。明治維新だってせいぜい数百年でやっている。明治維新の維新に皆さんがなるかどうかの瀬戸際なんです。世界賢人会議会長のアーヴィン・ラズロ氏は、2012年までにアーリーアダプターからアーリーマジョリティにいける壁を人類が広げられるかどうか、できなければ人類は滅びると明言しています。2012年は目の前です。日本型環境教育を含めて、人類が環境に関する扉を開けるかどうかの瀬戸際にいるということ、特に若い人たちは言いたい。



# 自然保護運動の流れから日本の環境教育を見る

(社)日本環境教育フォーラム理事 小河原孝生

今ここに20代の方が全体の35%程いらしてはいますが、その皆さんがまだ生まれていなかった頃に、どんなことが起こっていたのだろうかということをし少し歴史の中から見てみたい、と思います。名づけて、「何故1987年に第1回清里フォーラムが開催されたのだろうか?」です。

日本の自然保護運動というのは、1950年に尾瀬問題から始まり自然保護協会ができた。その当時は風景・学術的価値の保護で、学者による保護活動に留まっていたのが、日本の残念なところだったのかもしれないという気がしています。そして1960年代に突然、公害、自然破壊といったものが激化していきます。公害対策のための教育と自然保護対策のための教育という流れがずっとおこります。もちろん、私共も黙っているわけにはいかないので、住民運動・市民運動というものが発生していきます。そして1970年7月19日「全国一斉自然を返せ!デモ」が起こります。大阪のデモの先頭にいたのが、当時19歳の私と上田恵介(現・立教大学理学部教授)、古沢広祐(現・国学院大学経済学部教授)の3人で、いまだにこのような活動をしています。そして全国自然保護連合というユニオンが結成され、あるいは私共は「自然を返せ!関西市民連合」といった、超過激な運動体を結成します。

でも、実際に保護した地域が今、環境教育の場になっているか?大阪の自然を守るためにどういったことをすればいいかという、告発型から政策提言型という方向に運動は進んでいきます。当時1973年にはアメリカで行っている環境教育が紹介され、あるいは1974年に沼田眞先生が環境教育カリキュラムの研究を始めますが、私達は全くそこにはタッチしていません。自然保護教育が全盛期、大阪自然教室なども自然保護教育をしていました。そして政策提言型の活動、例えばタンポポを調査して、自然の変化から環境を捉え、それを環境づくりに役立てていこうという政策提言型の活動が、運動体を事業体に変化させていきます。これは非常に大変なことで、今でもそうです。

私が25歳の時に社団法人大阪自然環境保全協会を設立して、保護(Protection movement)から保全(Conservation)という考え方へ動いていこうとするわけです。そういった動きが功を奏したのか、どう反応したのか、1977年に全国自然保護連合が分裂します。それは冷静に考えてみると、今あるがままをそのままにしたいとする保存主義、あるいは告発型の運動を続けていたい、運動体としてはそのままにしたいというグループと、保全主義型、参画型、事業体型の運動を続けたいというグループとに分裂していきます。その後10年を我々は、失われた10年と呼んでいます。保全思想あるいは環境教育というものが、1980年代中頃まで根づかないという時代が続いていきます。

私はどうしたかということ、1978年に東京へ行き、日本野鳥の会で大井野鳥公園の初代レンジャーとして生息環境の保全や、そこにおける環境教育の展開をしました。7,000人のバードウォッチン

グのガイドをしたり、56,000人の署名を集めて野鳥公園を拡大したりという運動をしました。1981年に民間第1号のウトナイ湖サンクチュアリ(北海道)、1983年に福島市小鳥の森、1986年に環境省補助事業で横浜自然観察の森といった、総合的に生息環境の保全をしながら環境教育を展開するという施設、それから人材育成を進めていくわけです。1980年の秋、野鳥の会のある方のご紹介で、川嶋直さんと出会います。1983年にキープ清里サンクチュアリの活動が始まります。当時からここを環境教育のメッカにしようということを含言葉に、1985年にエコロジーキャンプ、1987年にネイチャーセンター、これは野鳥の会会員の一部分の方が材木を一部寄付して下さい、それを有効に使おうということで作りました。

まさに失われた10年を取り戻すために、1987年9月には第1回清里フォーラムを開催しました。この10年間そういったネットワークが一切機能してこなかった、それを紡ぎ直そうということでこのフォーラムが始められたわけです。何故、1回目を環境教育と言わなかったか?当時環境庁自然保護局が自然保護教育をやり、企画調整局が環境教育をやっていたんですね。また、環境教育は生活環境系ではないの?といったイメージがありました。でも皆さんとこのミーティングを進めていく中で、第2回目からは環境教育フォーラムという形に名前を変えています。

その後、1989年には野鳥公園の拡大会議、ものすごい生息環境を復元・再生し、環境教育プログラムをどう展開するかという視点から、そもそもこの施設が計画・設計されております。あるいは1994年に八ヶ岳環境と文化の村、千葉のいすみ環境と文化の里(環境庁補助事業)、1996年に環境ふれあい公園(建設省が全国約40箇所)、1999年に自然発見館、2000年に田貫湖ふれあい自然塾(環境庁)、大阪の紀泉わいわい村、そういった施設が動き出していきます。

共生の時代を迎えて、人間と自然の分離にはもう限界がきている。理性的には科学的な一体論を唱えることは可能なだけけれど、日本人は論理ではなかなか納得しないです。むしろ感性の、つまり情緒的な一体論です。ずっと今までそうしてきている、まさに日本的。体験をすることで納得するわけです。だから体験活動が浸透するんです。でも、やはりこれを融合する中で、新たな共生の時代を目指すべきなのではないだろうかと思えます。そして一方では、環境主義あるいは保全主義を進める、これは木を切る自然保護です。もう一方では、自然(じねん)主義、あるがままにそのま



まにしておけばいいという保存主義、これは1つ間違えると木を切らない自然保護になってしまいます。そして実は、私共の意識の中には、木は切らない方がいいよね、という気持ちがあるわけでもありますが、そういったものをまたもっと融合して、生態主義といわれる考え方にもっていく必要があるのではないかと思います。それを英語ではエコゾフィー、日本語では生態的哲学と言いますが、自然のエコロジーと社会のエコロジー、そして心のエコロジーというものを融合していくのが、非常に大切なのではな

いかと考えています。

最後に皆さんに聞きたいのは、自然体験、自然学校といった"自然"という言葉を使う時に、それをNatural(じねん)な体験として使うのか、Nature(天然)を対象とした体験として使うのか？これをorにするのかandにするのか？そういったことが今、実は我々の活動の1つ1つの中でも問われているのではないかと。そこを明確にすることが、日本型環境教育の一番根底につながるのではないかと思います。

## 国際協力からみた環境教育

JICA 地球ひろば所長 草野孝久氏

私は山の中で育ちまして、農学部出身で JICA の中でも農業関係の開発等をしていましたが、1992 年リオの地球サミットの後、生物多様性の担当をしたあたりから環境に染まり始め、自然環境部を JICA の中でつくる仕事をしたり、自分で志願してプロジェクトに行ったりしています(実は JICA の職員というのは本当の現場、プロジェクトには行かないものなのですが)。自然環境が大好きで、アウトドアライフとか、BE-PAL など大好きで読んでいましたが、それが高じてこうなりました。

私は勉強不足で日本型環境教育というのはよくわからないのですが、先程のお三方のお話を聞いてわかりました。プレゼンの中には入れていませんが、私の体験したところでは「共生」という言葉が出てきました。東南アジアは特に、今でも南米の原住民あるいは少数民族、アフリカでも所謂自然に近い生活していますが、これは全部、共生ですね、そういう意識は持っています。ここは日本人に近い。しかし、近代化していく中で欧米型の考えが強く入ってきているということを私は国際協力でいろいろな国に行っている中で感じております。

JICA のアプローチの中では、ミレニアム開発目標、これは日本も大分関わって作った目標で、2015 年までに世界の貧困を半減するとか、持続可能な環境の確保など、そういったことも引き続き行っております。それから人間の安全保障、これは緒方貞子理事長とコフィ・アナン前国連事務総長との共同的なアイデアで、これと環境を結びつけていく。簡単にいうと、ここの人に届くような協力と環境を関連させて考えていこうというものです。能力開発と環境は、ソフトの方に力を入れようということを考えております。開発プロジェクトと環境プロジェクトで何が違うのかというと、JICA の場合、開発プロジェクトだと環境社会配慮ガイドラインというものを作っております。これは特に環境系の外部有識者や住民参加の協力を得ながら作っていて、これに基づいて開発プロジェクト自体が生態系や人間の中の弱者に対して悪影響を与えないか、ということを書いています。特に最近では開発プロジェクトの中でも、環境教育の必要性があるということが事前にわかれば、コンポーネント化していきます。コンポーネントというのはプロジェクトの中の一部として取り組むという意味で

す。住民主体ということを中心に行っています。環境と調和した社会の実現のためにということで、事業を中心にやっております。

自然環境保全の中では、戦略的に取り組もうということで、自然資源の持続的利用、生物多様性の保全、荒廃地の回復の3つの重点分野を置いています。

日本が全部できるわけではないので、この辺は日本の得意技である日本型の環境保全というのは、この3つだろうというふうに考えてやっております。

JICA のアプローチで、自然環境の維持と人間活動の調和を図るという時には、守るということと利用するという、先程小河原さんが説明されましたように、利用することを含めたいという考えはないかと思っています。ここで一番重要になるのが"知る"ということで、これが環境教育である。ただ、環境教育を途上国でやる場合、一番問題なのが、教育をやる側が自然あるいは環境というものに対する理解をしっかりとしていないと、間違った方向に持っていかけてしまうということ。やはりきちんと調査能力を高めて、それから住民の意識向上に向うようにしています。

例えば、木の成長が早いという話が稲本さんからもありましたが、日本は土壌が深くて150cm くらいあるのに対して、向こうは土壌が非常に薄くて40cm くらいあればいい方で、その木の成長戦略は日本の木と違って、栄養を地下ではなくて上に貯えています。そういうことを知らずに、欧米の受け売りで環境教育をやっているような先生が東南アジアや熱帯にはいるわけですから、そこも変えていっていただかなくてはならない。

そういう重要なこともありますから、JICA では自然環境保全の3重点に対してマトリックスがあって、政策とか実施体制とか、保全技術の普及体制の構築のところで環境教育っぽいことを行います。それからモニタリング調査、現地に適した技術の開発、生産活動への支援と生計向上、この辺でも住民を巻き込んでいって環





環境教育っぽいことをやります。最後に意識の向上がありますが、これが非常に環境教育。住民の協力を得る活動、これは住民が参加してワークショップをやるだけではダメで、やはり彼らが主体性をもってくれないといけないので、住民社会を巻き込んだような具体性のある運営計画をつくるようにしています。住民の目から見ていくといろいろな圧力があります。自然環境保全はどこへいっても都市生活が原因です。私達のような生活が自然破壊の原因ですから、都市生活の変化は不可欠である。この辺りについて「村落から考えた人間社会の在り方」というものを考えなければいけないのではないかと思います。一般市民の環境意識を向上させるということでエコツーリズムなどを行います。もう1回住民の目線で考える・・・私は農業普及の世界で長いことやっています、日本型の農業普及ではこういうことをやっていたんですね。開発問題や環境問題への市民の理解を向上させて国際協力に参

加してもらおうということで、JICA 地球ひろばはあるのですが、ぜひ一度遊びにきてみて下さい。参加のサイクルとして、ここでも同じように気づき 理解促進 行動の変化ということをやっています。稲本さんの E.M. ロジャーズの前段階になるようなところで、個々人が持っている要因から知識 態度 決定 実行 確信まで移る行動の変化のところをやっていて、ここから先はロジャーズの変化につなげれば良いと思います。環境教育というのはコミュニケーション・チャンネルにはたつきかけていくもので、そのプロセスのどこに働きかけるかを意識したアプローチが必要です。

結びとして、環境に対する行動の変化を起こすプロセスは、海外でも日本でも、都会住民でも村落住民でも同じだと思います。ただ、対象集団や個々人の特性要因を知らずして適性なアプローチはできない、ということです。

## 輸入型( ? )環境教育と日本型環境教育

同志社大学大学院総合政策科学研究科 西村仁志氏

僕は今回の「日本型環境教育の知恵」の編集委員の一人として、執筆と編集作業の関わりをもちさせていただきました。1992 年出版の「日本型環境教育の提案」が何度も紹介されてきましたが、今回のタイトルをどうするかという議論の中で、もう一度日本型ということをしっかり受け継いで、考える機会にしようということになりました。僕自身にとってもいろいろ考える機会になりました。「日本型環境教育の提案」で日本型環境教育の提示がされましたが、これはその過去 5 年間の清里環境教育フォーラムの議論を踏まえて、名づけられました。

当時は欧米の優れた事例が、目指すべきモデルとして認識されています。日本になかなか紹介できる事例がなかったものから、そういうことをモデルとして、提案として出されました。当時既にいろいろなものが導入されていて、一方では、輸入型でいいのかという批判的な見方があったように思います。例えば、1980 年代にはネイチャーゲーム、アース・エデュケーション、1990 年代にはプロジェクト・ というシリーズがいろいろ紹介され、2000 年代に入って科学・数学教育の GEMS が紹介されています。しかしこういうアクティビティやカリキュラムだけではなくて、当時私達が目指すべきモデルあるいは憧れのモデルとして、ぜひ日本の中で定着させたい、あるいは形づくっていききたいということで、以上のようなモデルである参加体験型の環境教育アクティビティやカリキュラムが示されていたのかなと思います。

それから独立自営型の自然学校の経営モデルみたいなものもここで紹介されて、その後自然学校を旗印にして、日本にたくさん自然学校をつくっていきこうという動きが始まることになります。また、地域づくりへの応用ということで、エコミュージアム、エコツアー、エコツーリズムなど、地域に密着した観光の在り方を通じて、地域おこし・地域の発展を目指していこう、そういった

ことも紹介されました。学校や行政や企業と、我々民間との連携をしながら、環境教育を進めていこうというものも紹介されました。アメリカなどでは、環境学部や環境のスペシャリストを育てる高等教育機関などによる、専門人材養成というものがあります。そういうものに代表されるモデルが日本に

おいて実現できたらいいな、ということで本の中に提示されたのかなと思います。

果たしてそういうものが輸入できるのか？ということで考えてみました。確かに輸入しやすいのはアクティビティ集やカリキュラム本なんですね。あれは日本語に翻訳して、日本に合うような言葉に置き換えて紹介することができます。しかし、これを日本の自然の中で、アメリカ人とは違う気質・文化を持った日本人を対象に、きちんとした教育的効果をもって実施していくことは決して簡単なことではないと思います。いろいろなアレンジが必要だと思いますし、ローカライズということでは関係者の方が苦心されたのではないかと思います。まして、アクティビティやカリキュラムと違って、自然学校の経営、地域づくり、パートナーシップ、大学をつくるということを実現しようと思ったら、これは並大抵のエネルギーではできないなと思います。単に本を 1 冊翻訳したら実現できるかというと、決してそう簡単にはいかないわけですね。これはその後 20 数年かけて、JEEF の 20 年の中で具体化に取り組んで、日本の社会の中によやく位置づけてきたといえるのではないかと思います。安易に輸入したというものではな



いだらうと思っています。

改めて日本型環境教育についてこの本を出すにあたって、編集委員会での議論をふまえ、『私たちは1992年に「日本型環境教育の提案」を出版し、日本における環境教育のあり方について世に問いました。その後、これらの提案は各地での実践によって「自然学校」、「人づくり」、「行政・企業とのパートナーシップ」をはじめ日本の社会のなかで実を結ばせることができました。「日本型環境教育」とは、北海道から沖縄にいたる列島弧の自然、気候風土や、そこに生きる人々の暮らしや文化に根ざしながら、私たちの仲間が20年かけて「カタチやウゴキ」にすることのできた様々な環境教育の実践のことを指したいと考えています。』と、このようなかなり広い定義づけを行いました。そして、今後も新しい「日本型環境教育」が生み出され続けていくことを期待しているということです。

結論として、我々は欧米をはじめ世界中の優れた環境教育をモデルにし、目標にしてきました。学ぶべきモデルがきちんとあったということは、我々にとって非常にラッキーだったと思います。一方で、日本各地にまだ残っていた、あるいは今も残っている持続可能な暮らし方や地域経営・地域コミュニティの運営のあり方からも、多くを教えてもらったように思います。中山間地域で活動されてきた自然学校の皆さんなどは特にそうだと思いますが、そういったことを取り入れながら、地道に一つずつ環境教育の「カタチ」や「ウゴキ」をつくってこられたのではないかと思います。そして、ようやく20数年かけて日本において定着できたものが「日本型環境教育だ」と私は考えております。今回の本もそういった努力が実を結んだものとして「知恵」というタイトルをつけさせていただいたのだと思います。こういった話についていくためにも、是非この本「日本型環境教育の知恵」をお読みいただければと思います。

## 多彩に発展してきた自然体験型の環境教育

(社)日本環境教育フォーラム理事 広瀬敏通

私は日本型の環境教育というものを、一つの大きい流れとして、自然体験型の環境教育という面に視点を置いて、また、この国の未来に危機感を持つ者の一人としてお話します。自然体験型の環境教育という言葉は、非常に馴染みがなくて、据わりが悪くて大変苦労しました。言葉に私たちは20年間苦労し続けてきたのですが、そういう中で例えば、こんな言い方をして動いてきました。

1つ目は、エコツーリズムという地域産業や地域おこしとして生まれてきた。一方でグリーンツーリズムとかフォレストツーリズムとか、いろいろなツーリズム。今、日本政府はニューツーリズムというところにまっしぐらですが、こういう言葉は縦割り行政がつけたりするものなんですが、こんなことはどうでもいゝもので、違いよりも互換性(お互いに使い合えること)、それから普遍性(そこを流れる変わらないもの、価値みたいもの)にしっかり目を置いて考えていくべきものだろうと思いますが、エコツーリズムという言葉が地域産業や地域おこしに非常に使われてきた。海外でエコツーリズムは、自然学校のしゅみを指すことが多いのですが、日本の政府や業界では、基本的には観光と地域の活性化ということで位置づけています。これに一つ特化したものとしてはやはり、観光からこぼれ落ちてしまった里山とか奥山、地域を元気にする観光以外の様々なアクションが起きています。これがエコツーリズムという言葉をとるあえず使いやすいということで使っているケースが非常に多く、中山間地(過疎地)に広がってきています。エコミュージアムとかエコビレッジも同じ言葉として考えていただければいいと思いますが、日本にも続々と生まれ始めています。

2つ目に、自然体験型の教育活動として、例えば森のようちえん、児童保育、キャンプ(キャンプ屋さんから自然学校が生まれたケー

スも多い)、それから修学旅行、自然教室、ゼミ活動など、こういった教育活動として自然体験型の環境教育が取り組まれてきています。幼児から若者まで、さらに全世代に広がる教育プログラムです。体験学習という言葉を使った政府のデータでは、1998年には中学校の28%だけが体験学習に参加した、こ



れが2007年には小学校の46%、中学校の62%、高校の49%が実施していると、これだけ広がってきているということですね。

3つ目に、参加型の施設展示として広がってきた。触る、抱く、持つ、嗅ぐ、舐める、かじる、味わう、遊ぶ、調べる、確かめる、作る、参加するといったものです。私はマレーシアのボルネオでハンズオンの本格的な展示を初めて見て、非常にショックを受けたのを今でも思い出します。日本の固定型の展示ではない、参加型の作り込む展示、作ることで一緒に考える展示というものが広がってきた。これも自然体験型環境教育の一つの流れだろうと思います。ピジターセンター、博物館、水族館、図書館、美術館、児童館などに、世界的に広がってきた新世代の展示思想と技術ですね。今、ハンズオンと言いましたが、これも非常に広がってきていますし、インタープリテーションという様々な解説活動、あるいはプログラムと言い換えてもいいと思いますが、プログラムと展示がつながっている、展示を通してプログラムを行う、ということが活発に行われています。展示そのものが常に変化していく、こんなような考え方が出てきました。

4つ目には、人間に呼び名がこんなに出てきました。最初、私たちは自分達のことを指導員と呼ぼうかな、と議論しました。ある所はスタッフ、またある所はレンジャーと言ったり、他にもリーダー、カウンセラー、インストラクター、インタープリター、ガイド、自然案内人、個人商店、フリーランス、コーディネーター、ファシリテーターなど、こういう様々な名称が生まれて、これが新しい職業、新しい業態、新しい生き方を指しているのではないかと思います。新しすぎてカタカナのままというかんじもありますね。

5つ目に、自然学校と呼ばれる活動の主体として、森・山・川から始まり、海・里・町・大きい都市に広がってきた。様々な分野に自然学校が広がってきて、自然体験という枠を大きく超えた活動が生まれてきている。ここには初めて参加された方もいるので、自然学校って何？というところを簡単に言うと、JEEF に自然学校センターというのがあって、こんなことを言っています。まず活動の場を持っていること、それから常駐している専門家がいて、プログラムを通年実施していること、これがだいたい大きい括りです。さらに、組織を運営するプロデュースの仕組みがあるとか、安全管理の仕組みがある、ということも加えようかという議論もあつたりします。人と人、人と自然、人と社会をつなぐ組織的な自然体験活動を指している、というような考え方で自然学校と呼ばれています。

これが2002年環境省の委託を受けて行った調査では、約2,000校の自然学校があることがわかりました。これには大変私たちも驚きました。2006年JEEFの調査では、調査母数は2002より小さかったので総数は推定になってしまったのですが、およそ3,000

校に広がっているとみられています。世界各地にも大きく広がっています。ほとんど皆さんが知っている国には、自然学校ないしは自然学校的な活動が生まれているということなんですね。そして、21世紀型の社会企業体として世界各地に急速に広がる。社会企業という言葉が盛んに言われていますが、テーマとしてもライフスタイルから地域振興、アウトドアスポーツ、国際協力、自然保護活動、学校教育、異文化教育など、様々なテーマに広がってきていて、私もこの中のかなりのテーマを手がけてきました。それから運営形態としても、民間の独立自営型とか、行政がやる青少年交流の家・少年自然の家とか、千葉自然学校のようなネットワーク型とか、いろいろと広がってきました。企業が自然学校をやっているのも多いですね。

私たちはプロの自然学校を目指してきたんですね。JEEFのこの清里ミーティングでもプロとしてどうやって事業化できるか、していくかということをやっとやってきた。でも、最近つづく、プロだけでなくアマチュアの自然学校がもっともっとたくさんあっていいだろうと思っています。例えば、小学校区に一つのアマチュア自然学校があって、全ての子どもが幼い時から何度か参加している。いくつかの町全体で一つのプロの自然学校がある。アマチュアとプロが役割を分け合って、誰もが自然学校に参加している。そういうイメージを持っています。そして、それがこの国を変える力になるのではないかと考えています。プロの自然学校、アマチュアの自然学校、ちょっとだけ自然学校、いろんな形があつていいだろうと思っています。

最後に、自然学校という形の、この世界を変えるひとつのアクションに、是非皆さんも参加していただきたいと思います。



---

# 2 日目

## ワークショップ

---

### 【午前の部】

1. 科学と環境教育 ヤマネに学ぶエコロジカルな暮らし方
2. 生き物との共生について ~どんな共生があるのか~
3. 環境教育&ESDを”広げる×深める”政策を考えよう
4. お互いの関係を作るコミュニケーションスキル
5. 社会人大学院生&興味ある人集まれ!
6. エコとエネをつなぐ環境教育を考える
7. 森林環境教育と Project Learning Tree
8. 環境教育を評価する「環境教育を棚卸しましょう」
9. 企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える

### 【午後の部】

10. 企業のための環境NPOカタログ編集会議
11. どうする!《限界集落》またの名は《上流社会》
12. 科学と環境教育総集編 科学と環境教育の関わりを定義する
13. オオバコずもうで勝つ方法! 理学系研究室の自然体験
14. 川遊びのルールを広めよう!
15. 日本型、日本的を考える ~日本の自然観という視点~
16. 地球環境カードゲーム マイアースを遊び尽くす
17. 障害者と共につむぐ環境教育の企画をつくる!
18. 森づくりのための戦略会議 ~行政・企業・NPOの協働~

は、主催者企画ワークショップ



# 科学と環境教育

## ヤマネに学ぶエコロジカルな暮らし方

実施者:小河原孝生(NPO 法人生態教育センター)

河原塚達樹(財団法人日本レクリエーション協会)

北野日出男(社団法人日本環境教育フォーラム)

湊秋作(財団法人キープ協会やまねミュージアム)



「科学と環境教育」をテーマにした本ワークショップは、2003年の環境教育フォーラムから始まった。それは、環境教育の中で科学が果たす役割と意義を明確にするためであった。それ以来、今回で6回目のワークショップとなった。

今回の目的は主に2点であった。1つめは、ヤマネから何を学び、何を暮らしの中で変えるのか？具体的な提案をすること。2つめは、ヤマネを守るためには暮らしをどう変えたらよいのか？(特に生物多様性の視点で)それを現実化するための具体像を考察することであった。

これを達成するために、当日のプログラムは、4つのプロセスで展開した。

**第1ステップ**は、野外の「ヤマネの棲む森」を実際に見て、ヤマネの生活を体験すること。参加者は、ヤマネの体重が20グラムを越えないことや冬眠中は体温が低く省エネを行うことを知った。

**第2ステップ**は、やまねミュージアム館長である湊の「ヤマネと日本の自然観」についてのパワーポイントを用いた話を聞くことであった。ヤマネの特性である「森林性」、「合理性」、「省エネ性」、「環境適応能力性」など、ヤマネのエコロジカル面を明確化することで次のステップのエコロジカルな暮らしを考える材料を参加者の中に形成できるようにした。

**第3ステップ**として、「ヤマネの生き方をヒントにエコロジカルな暮らし&社会化は何かができるか」のワークショップを展開した。4つのグループを以下のように分け、ヤマネから学ぶことを考えた。

**冬眠戦略・長寿性・省エネの特性**からは、「健全な人の感覚の生活をする事の重要性」を学んだ。

**遺伝的多様性**からは、「自然に寄り添った生活の大切さ」を学んだ。

**森林性、樹上性、栄養選択性**から「日々の生活にメリハリをつけること、季節に合わせたライフスタイルの意義」を学んだ。

**かわいさ、絵本性**から、「おだやかな時間の大切さ」などを学んだ。

**第4ステップ**として、上記のワークショップの各グループの発表を行った。

これらの活動を通して、ヤマネに学びエコロジカルな暮らし方をまとめることができた。

そして、6年間の本ワークショップのまとめ、「科学と環境教育との関係」を明確にし、さらに「行動化」と「暮らし」へと導くための原理を今後、まとめあげて話を話した。

# 生き物との共生について

## ～ どんな共生があるのか～

実施者: 徳永豊(スリーヒルズ・アソシエーション)

浜本奈鼓(環境教育 NPO 法人くすの木自然館)

### 【ワークショップの概要】

「生き物との共生」3年間でシリーズ化して取り組む。今回は、その2回目。せっかく全国から集まってきて、話し合いの場があるということで、各地で取り組んでいる事例報告をしてもらった。

エリア	対象	キーワード
対馬の取り組み	ツシヤママネコ	島、対馬の文化
鳥取県水鳥公園	コハクチョウ	観光資源と生息地 観光者の意識
広島世羅公園	ダルマガエル ヒョウモンモドキ等	カヤ場の必要性
つくば市	ススキの原っぱ	生息エリアの保全
鹿児島県重富干潟	干潟の生物	住民
山口県周南市八代	ナベヅル	子供100人、ツル100羽 人とツルの共生、住民意識
石川県能登半島	里地の生きもの トキ、マツタケ等	住民意識の合意形成

### 【実施の方法】

- (1)今回は、現地で活動している人にそれぞれの活動内容を発表してもらう。
- (2)発表後、気になったことや疑問点など質疑応答
- (3)生きものとの共生について意見交換

地域にはそれぞれの生物多様性があり、それらはマスコミ、新聞などのメディア情報等により様々な現状や知識を知ることができるが、反面マスコミが必ずしもすべてを報道するわけではないので、偏った情報が流れているのではないかと。

地道な活動も100あれば100の取り組みがあり、それらを知る機会を作らなければならないのではないかと。

それぞれの共生は、その場、その場の地元の人にはばかり任せきりで居なくなったときに、大騒ぎする。

失われていることに気づくこと どうしたら気づくのか考えよう

やはり、それは環境教育の力を使うべきである。

ではどのようにそれをプログラム化するのか、どのように仕掛けるのかは来年につなぐことにする。

### 【実施者の感想】

生物多様性とはなにかという課題に取り組むというよりそれぞれの地域にある課題を知り、それが地元でどうやって守り、どうやって地域の財産となり、人々の生活の中でどうやって共生してきたのかというものを客観的に知る機会を作ることが大切ではないかと思う。それが環境教育の世界でうまくリンクさせて一般化させていくと知られていない世界から知られる世界に変化していくのではないかと考えている。

生物多様性は、身近なところに存在すること、それに気づくこと。気づいたら行動すること、ただどうやって行動していいかわからない人のために環境教育の場を設定していくことが必要、それは学校の現場であったり、それを教える先生であったり、企業であれば社員教育の場でそれを活用していくことが必要ではないかと考える。

その意味では、第2回目の取り組みは、日本の中の7事例を取り上げて、実際に現場で動いている人からの報告を受けた。参加者の反応もよかったように思う。関心を持つこと、持たせることを意識して第3回目のまとめのワークショップに繋げたいと考えている。

# 環境教育 & ESD を

## ”広げる×深める”政策を考えよう

実施者：村上千里(NPO 法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議)

伊藤博隆(地球環境パートナーシッププラザ(GEIC))

### 【目的】

2009年環境教育推進法から5年目の見直しの年。また、ESDの10年スタートからちょうど5年目で、後半5年に向けて何をすべきかを検討するタイミングとなっている。ESD-Jでは、2009年に向けて、さまざまな現場で実施されている環境教育やESDが、もっと広がるには、そしてもっと深まるには何が必要か？について検討し、政策提言をまとめつつある。今回のワークショップでは、この提言案を参加者と共に検討し、ブラッシュアップすることを目的とした。

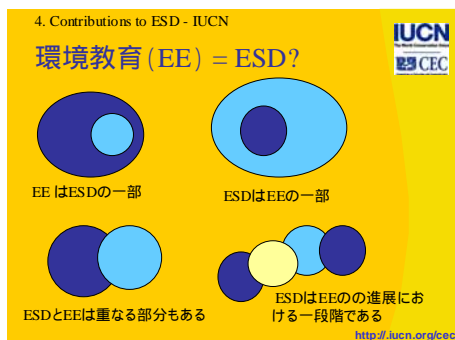
### 【プログラム】

#### 9:00～ 主催者オリエンテーション

- ・今回のワークショップのねらいと進め方の説明

#### 9:05～ ちょっと重たいアイスブレイク「EEとESD」

- ・環境教育とESDの関係について、以下からひとつ選び、その理由を語る自己紹介。



(参加者は研究者、企業、環境教育施設職員など15名)

#### 10:00～ ESD-J 政策提言 ver.2 の概要説明+Q&A

- ・ESD-J1の政策提言案17項目を簡単に説明
- ・ポストイットに賛否とコメント記入

#### 10:30～ 休憩+ポストイット貼りだし

#### 10:45～ 賛成・反対投票+全体ディスカッション

### 【関心の高かった提言案とそれに対するコメント】

ESD-Jから政策提言案17項目を説明し、参加者から「賛成：青」「反対：ピンク」「その他：黄」のポスト

イットにコメントを記入していただき、壁に張り出した。賛否あわせてコメントの多い提言案から順番にディスカッションを行った。以下、コメント数の多い順に、簡単に紹介する。(抜粋)

#### (1) ESDの普及に向けた広報戦略の作成・実施

「とっても大事」「知ってもらって初めて進む」「メディア戦略が重要」などの意見が多かったが、「一般向けのPR以前に、教育関係者への理解の浸透が重要」「ESDと呼ぶべきかどうかは検討の余地アリ」との意見に共感が集まった。

#### (2) ESDの可視化と普及のためのESD登録事業

「可視化は重要」「支援につながる仕組みを」などの賛同意見が多い中、「形骸化の危険性」「選別にならないように」などの危惧も。

#### (3) CSR教育の推進

重要性を指摘するコメント多数。しかしなかなか進んでいない現状をどう動かすかが課題。コンサルティングがビジネスになることへの期待感もあり。

#### (4) 地域におけるESDセンター機能の構築

「ハードはいらない」ものの、「つながりをプロデュースするコーディネーション機能」の必要性を多くの人が指摘。「自然学校がこの役割を果たしていくべき」との声も。

#### (5) 総合的な学習の時間の一層の活用

学校でのESD推進にはよいアプローチ先との認識は高いが、文科省として「総合とESDの位置づけを明確にすることが重要」との声も。

#### (6) ESDに関する研究の深化と学問領域としての確立

「必要」と「不要」の両論アリ。関連する複数の学界での連携・議論が必要、との指摘も。

これらに続いて、以下の項目にも5件程度のコメントが寄せられた。

#### (7) ESD全国円卓会議の更なる充実・強化

#### (8) ESD推進のための法制度の検討

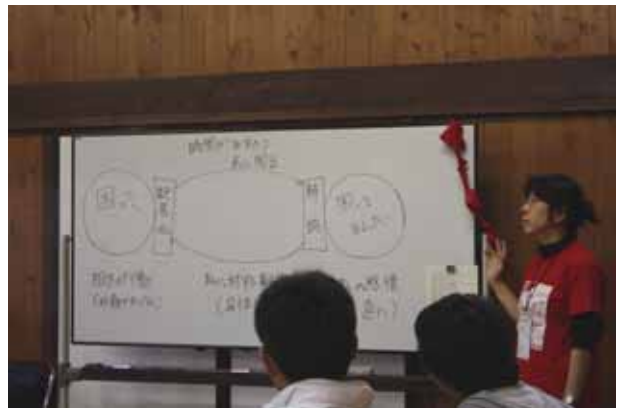
#### (9) 大学におけるESD活動の強化

#### (10) アジアを中心とする地域におけるESD関連市民組織のネットワーク化

# お互いの関係を作るコミュニケーションスキル

実施者：高木幹夫・河野忠一・武石泉・柴原みどりマリアンヌ

(NPO 法人体験学習研究会)



## <はじめに>

実施者側の思いを参加者側に伝えたい、あるいは参加者の考えていることや思いを受けとめたい。そのためコミュニケーションにはどのようなことが必要なのか、をトマス・ゴードンが提示したコミュニケーションの効果的な方法である「ゴードンメソッド」を切り口の一つにして、皆さんと考えたいと思いこのWSを実施しました。

## <実施内容>

(1)「コミュニケーションにおける癖」をテーマに自己紹介・ゲームを通じてコミュニケーションについての体験

(2)ゴードンメソッドでの「聞く」体験

「相手が何か伝えたい、言いたい」「相手が何らかの困ったことを伝えてきている」という場面で、私たちは普段、良かれと思って様々アドバイスや解決方法を提示しがちです。ゴードンメソッドではこのような場面で、相手の解決できる力を信頼し、「聞く」ということを(相手の言ったことを繰り返したり、気持ちを汲んだり)します。今回はコミュニケーションの仕組みについて簡単に説明後、3人1組になって実際にお互いの話すことを「聞く」という体験をしました。その後、感じたことや疑問点を話し合いました。

(3)ゴードンメソッドでの「話す」方法について

自分が相手に伝えたいことがある時、相手の行動によって自分が困っている時には相手に「伝える」ということをしていきます。ただ、伝え方によっては「本当に伝えたいこと」が伝わらない、ということになりかねません。ゴードンメソッドでは「私」を主語にして、相手の行動が自分に与える影響を明確にし、伝えるという方法を提示しています。また、自分を伝えた後には、相手の言うことに耳を傾けるということが大切です。今回は時間の関係で体験ではなく、実施者側から図示を交えてお伝えしました。

(4)まとめ

お互いの関係を作るコミュニケーションで必要なことは？

最後に、参加者の皆さんが感じたこと、学んだことを振り返り「お互いの関係をつくるコミュニケーション」にはどんなことが必要なのか、何が大切か、について、3人1組でポストイットに書き出して頂き、模造紙に貼り共有しました。

## <最後に>

短時間でゴードンメソッドのエッセンスだけをお伝えすることに不安・未消化感はありましたが、参加者の皆様と共にお互いの関係をつくるコミュニケーションを考えることができ、感謝しています。ありがとうございました。



# 社会人大学院生 & 興味ある人集まれ！

実施者：西村仁志(同志社大学大学院総合政策科学研究科)

西村和代(環境共育事務所カラーズ)



環境教育関係者の間では、現場で活躍する実践者(社会人)が大学院へ進学するケースがよく見られるようになりました。また大学教員となって環境教育の現場とアカデミックな世界をつなぐ仕事に就くという方も何人も出てきています。(ワークショップ呼びかけ人の私たちもそれぞれのケースです)

このワークショップではこうした現場の実践者が大学院生になる意義について、また調査や論文執筆、学会発表などの研究活動や「久しぶりの」学生生活など、その実態について現役社会人大学院生や経験者の方々と情報交換しつつ、これから社会人大学院生になることを検討される方々に参考にしてもらおうと企画しました。

ワークショップに集まった9名は現役院生、経験者、候補者、大学教員と期待通り様々な方で、それぞれの期待や疑問にこたえつつ、以下のような話題が進行しました。

- ・大学は「社会人の学び直し」のニーズにこたえる機会をいろいろ用意してきた。時間割を平日夜間や土曜日を中心に設定する社会人大学院も増えてきている。

- ・社会人大学院生はモチベーションが高い。(自分で学費を払って、自分のために学びに来ている。)
- ・実践者と研究者とは別々だった時代から、その垣根が少しずつなくなってきた。
- ・実践をしてきた人自身が論文を書き、学术界にフィードバックする活動が大切である。領域によっては、研究分野もあまりやっている人がいない！(先行研究として参照される)
- ・社会人になって課題を持って学び、修士号や博士号の学位を取ることで、新たな次のステップが始まる！(大学教員への道が開ける可能性も?)
- ・一般市民と環境教育のパイプづくりが必要だが、社会人大学院は様々な背景をもつ社会人がいて、つながるチャンスがある。
- ・研究、事業には推進の環境とお金がいるが、大学には科学研究費補助金やGP(注)をはじめとする外部研究資金を獲得するチャンスがある。

そして当日夜の「環境教育プレゼンテーション」に、飛び入りのかたちで松本大学教員の中澤朋代さんが「大学の使い方」としてこのワークショップの報告と提案をしてくださいました。ありがとうございました。また、今回のワークショップ開催を契機に、その後大学院への進学を果たされた方もおられました。今後もまたこのテーマでのワークショップを開催していきたいものです。

(注)「GP」とは、文部科学省による大学教育改革の取り組みのひとつで、各大学等が実施する教育改革の取組の中から、優れた取組「Good Practice(GP)」を選び、支援するもの。その取組について広く社会に情報提供を行うことにより、他の大学等が選ばれた取組を参考にしながら、教育改革に取り組むことを促進することをねらっている。

# エコとエネをつなぐ環境教育を考える

実施者:好川治(J-POWER)

発表者:蟻原陽一(トヨタ白川郷自然学校)、関口智久(雨水市民の会)、

田中丈夫(東京電力(株))、八尾祐美子(東京ガス(株))



## 【はじめに】

持続可能な社会の実現のためには、環境問題をエネルギーの視点から考えることは非常に重要です。

エコ(環境)とエネ(エネルギー)を相反するものではなく“つながり”として捉え、エネを大切にすることがエコを大切にすることに繋がると考え、実感を持って学ぶことが、日々の暮らしの中でエコとエネを大切にすることを行動につなぐと考えています。

現在、様々な企業・団体が各々の専門性・独自性を活かし、エコとエネをつなぐ環境教育に取り組まれています。

この活動が広がっていくことを期待して、エコとエネに関心のある人が集い・お互いの思いを共有し・新しいつながりを作る“場”を創りたいと考えWSを開催しました。

## 【実施内容】

1. 趣旨説明
2. 全体で自己紹介
3. 活動事例紹介

J-POWER エコ×エネ体験プロジェクト(好川)  
(財)キープ協会との協働事業、森と水力発電所のつながりに着目した体験型エネルギー環境学習プログラム

## 学生によるエコ×エネ活動

～キャンドルナイトを事例に～(関口)

学生の環境活動およびキャンドルナイトの活動事例、課題として非日常体験を日常生活へつなげる「行動化」を提起

東京ガスの環境コミュニケーション活動(八尾)  
環境・エネルギー学習支援(出張授業・教材)企業館イベント、省エネBOOK、エコ・クッキング、EARTH VISION 地球環境映像祭、長野・東京ガスの森等々

トヨタ白川郷自然学校の事例紹介(蟻原)

“燃料電池の森づくり”:水力発電実験 燃料電池実験 森の役割と大切さを知る 森を元気にする活動(早魃 or 植樹)へとつながっていくプログラム  
東京電力の環境・エネルギー教育支援活動

(田中)

教職員対象「環境・エネルギー教育研修会」、発電所での自然観察会、全国大学生環境活動コンテスト、TEPCOのエコ先生プロジェクト、東京電力自然学校等々

## 4. 議論

「エコとエネをつなぐ環境教育を広げていくためには？」をテーマに四グループで議論し、付箋紙にキーワードを列記して模造紙上でまとめて全体で情報を共有しました。

子供が体験を家庭に持ち帰れば親子の行動化に、エネルギーの現場を魅せてほしい、生産・消費・エコ・エネのつながりの見える化を、価値創造型の環境教育へ・・・等々貴重な意見が沢山でてきました。

## 【まとめ】

初めてのWSでしたが、エコとエネに関心のある人々が新しいつながりを創る良い“場”になったと思います。今後も緩やかなネットワークを維持・継続していける仕組みを検討中です。

関心のある方は是非ご連絡下さい!!

# 森林環境教育と Project Learning Tree

実施者: 佐藤敬一・麻生崇志・小平斐美(東京農工大学農学部)



日本で「森林環境教育」は10年前に誕生したが、アメリカでは70年代から森林・樹木・木材について子ども達の理解のための環境教育の必要性が叫ばれ、Project Learning Tree (PLT)として、小中学校で実践可能な教材や教育法の開発や推進体制が検討され、現在、各州での先進的環境教育として実践されている。

このワークショップでは、PLTのアクティビティの体験、日本における森林環境教育の考え方やPLTの導入の可能性について取り上げた。

1) 9:00の開始から参加者が三々五々に集まるので、早く到着した者は木の名札とバードコールを作り、順次、到着した参加者に教えあうようにした。参加者がそろい、作業が終わり、ガイダンスとして、スタッフ紹介、スケジュール、「PLTとは(PLTの目的と推進体制)」の説明をパワーポイントで行った。

次に、アイスブレイクとグループ別けのために人間逆KJ法を行った。参加者一人一人がポストイットになり、似たもの同士が集まるのが人間KJ法であるが、これは同様な人間が集まり、グループ内での多様性がなくなる。そこで、紙に自分を表すキーワードを3つ書き、参加者同士で発表し、自分とは異なる人を見つけてグループを作る人間逆KJ法を行った。

さらに、そのグループ内で異なる項目(好きな野球チーム、好きなおでんの具、生まれた所など)を一定時間で数え挙げるゲームを行った。

その後、樹木の炭素量の測定方法をパワーポイントで説明した。

2) 屋外に出て、バードコールの使用法の説明の後、グループごとに樹木の樹高と直径を測定した。雨のため屋外での作業は短縮し、室内で炭素量の計算を行った。樹木の幹を円錐と仮定し、体積を計算し、密度を掛け質量を計算する。質量の50%が炭素なので、炭素量を計算し、また、二酸化炭素量に換算し、私たちの1年の排出量などと比較した。

その後、13の物質が木から出来ているか?否か?を問う、PLTのWe All Need Treeを行った。木質材料や紙、コルクの他にもメガネフレームやスポンジ、セロハンなどがセルロースから、バニラエッセンスがリグニンから出来ており、木が由来の物質が多いことを確認した。

3) 最後に、「森林環境教育の起承転結」、カリフォルニア州でのForestry Institute for Teachers (FIT先生のための森林林業講座)と同様なセミナーが日本でも必要であることをパワーポイントで説明した。

「起」: 森林環境教育は木と人と山の三角関係として、休・仙・杣(そま: 林業)を例に説明。

「承」: 西岡常一氏の「木に学べ」から「斧(よき)ゆうはえらいでっせ」。

「転」: CO2吸収源としての森林の適正な管理の重要性、循環型材料としての木材利用、カーボンニュートラルなどの概念の理解。

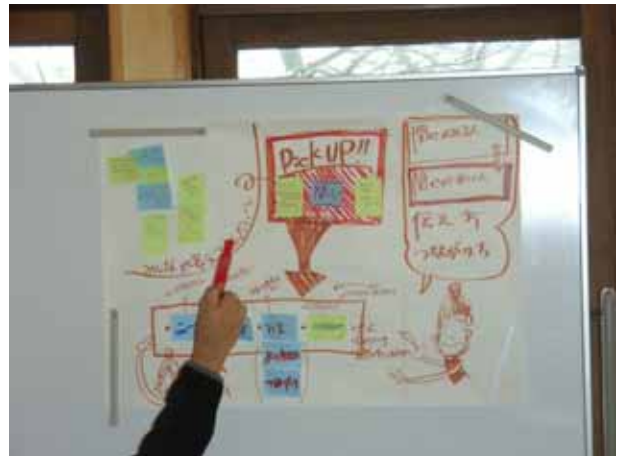
「結」: 木の漢字、森と林の違い(時間の関係で削除)。

PLTのアクティビティは2つだけで少なくて残念だったが、PLTの目的やカリキュラム、教材、推進体制、学校の先生への普及方法などのアメリカの現状を含めた内容にした。参加者に配る資料は紙ベースではなくCD-ROMに焼いた。



# 環境教育を評価する「環境教育を棚卸しましょう」

実施者: 森江 章(NPO 法人いしかわ自然体験支援隊)



まず自己紹介を行う。参加者は11名とやや小人数で所属も学生、行政職員、環境系NPO関係者で年齢や環境教育に関わる立場や経験の差も多少あるため、環境教育の歴史や現況について共有を行うこととし、前日の全体会で阿部先生の解説を振り返ると共に、東京学芸大学環境教育実践施設発行の「日本の環境教育概説」に目を通し、日本国内における環境教育の歴史や流れと現状について共有化する作業を行った。

参加者の中で環境教育とは何か環境問題とは何かと消化しきれないとの声があり、今回のテーマである個人々の活動における「環境教育の評価(棚卸)する」からやや外れるが、環境教育を一般的な解釈で個人の問題点を浮き彫りにすることとし、作業を2つのグループに分けて行った。

環境教育を多面的に捉えてもらうために、環境教育の視点だけでなく、環境経済や環境倫理の視点も踏まえて考えてはとアドバイスする。話し合われたと事柄は、概ね以下のような事であった。

地球環境そのものがどこか変じゃないか。  
行政、企業間のネットワークが弱く、相変わらず縦割り行政がネックになっている。  
市民があまり環境に関心がない(自分の身の回りのこととして捉えていない)。

環境問題に関心のある人が、関心の薄い人達に対してどのようなアクションを起こすべきか。またその起こし方・伝え方はどんなことがあるのか。

2つのグループのキーワードは「伝えること(方)」であった。結論ではないが、環境教育は非常に重要な役割を担っており、今回のワークショップにおいて伝える大切さが再認識できたのではないだろうか。

最後に参加者の感想より。

- 様々な議論をしたがまだ疑問の課題があるのでディスカッションを続けると良い。
- 理想と現実のギャップをどう埋めるか両方の立ち位置で議論していたのが興味深かった。
- 環境教育を考えるにあたり、問題の洗い出し、解決策としても「自然体験」の単語があがらなかったのは一考。

発表は「KP(紙芝居)」の手法もとり入れて行われ、20分程時間をオーバーして終了した。

# 企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える

実施者: 鶴ヶ谷優子(社団法人日本環境教育フォーラム)



JEEF とコスモ石油との協働プロジェクト「コスモ石油エコカード基金 学校の環境教育支援プロジェクト」では、学校の総合学習の時間等で環境教育プログラムを取り入れるための支援活動を、企業、NPO、学校の三者連携で行っています。今年度プロジェクトを実施している 8 地域 13 校の学校の先生、NPO スタッフが一同に集い、各地の活動報告、交流を兼ねて、学校に環境教育プログラムを取り入れる意義、三者連携プロジェクトのメリット・デメリット、改善点等について語り合いました。また、プロジェクト関係者以外にも、学校での環境教育の取り組みに興味を持つ学生、学校の先生、企業、NPO など多くの方が参加し、「企業、NPO、学校の連携による環境教育」の可能性について議論しました。

各地の事例紹介を行った後、今年度は6グループに分かれ、それぞれのグループで「当プロジェクトの良いと思う点、改善点」「学校の授業でどんな環境に対する取り組みがあるといいか」「環境の授業を行うために何が必要か」を、それぞれの立場から話し合っていたいただき、様々な意見をいただきました。

いただいた意見の抜粋です。

## 「当プロジェクトの良いと思う点、改善点」

- ・NPO と学校の協働が実現していること
- ・子どもの意識の高まり。体験を通じて身に付いた

学習となっていること

- ・地域に根ざしている地域のサポーターや近くの自然を活用していること
- ・支援によって、専門家が学校教育に参画できる。できることが広がる
- ・どう継続していけるかが課題
- ・効果、評価が今ひとつ不明確
- ・教員の環境教育への知識、理解を深められると良い

## 「学校の授業でどんな環境に対する取り組みがあるといいか」

- ・保護者や地域の人と一緒に学ぶ場がほしい
- ・都市部と地方の交流
- ・子どもたちの自主性、自発性を援助する形の学習計画、授業づくり
- ・教員への事前研修制度
- ・複数校の連携授業
- ・一般に開放してほしい
- ・家庭や地域を巻き込んだ取り組み

## 「環境の授業を行うために何が必要か」

- ・NPO はもっと行政や保護者に積極的にプレゼンしてほしい
- ・環境教育は好きな人が無償で行っているという意識を変える事が大事。
- ・結局人のつながりが大事。そこから全て始まる！
- ・「こんな環境教育をしてほしい」と学校からもっとオープンに具体的な声があれば企業も協力しやすい
- ・日常的に環境の授業を導入する
- ・先生方の情熱、熱意があればできるという事実を見た
- ・人（学校教育）と人（外部）のつながり

# 企業のための環境 NPO カタログ編集会議

実施者：川嶋直(財団法人キープ協会)

中野民夫(ワークショップ企画プロデューサー)、小林崇(環境 goo)

近藤修一(エス・ピー・ファーム)、中西紹一(プラス・サーキュレーション)

## 【今回の活動概要】

これまで過去 2 回の戦略会議を行い、企業と環境 NPO の協働を促進するための検討を行ってきた。そして 3 回目となる今回は「企業の担当者が環境 NPO を選定する際に使うカタログ作成」を行った。

～企業の担当者が CSR 活動や環境への取り組みの企画フェーズにおいて、協働先の NPO を探すとき役をもって判断するだろうか？～

環境 NPO の活動を正確に伝え、企業の担当者の心を動かし、思わず協働をしたくなる！そんなパンフレット(カタログ)を作る編集会議を行った。

## 【キーワード(要素)の整理】

約 30 名の参加者の中から 5 つの班に分かれ、カタログに載せる重要な要素、必須項目となるベスト 10 を洗い出した。清里ミーティングに参加している NPO のパンフレットを参考にしつつ、限られた紙面、スペースに効果的に伝えるためには何が重要か意見を出し合う。

「活動も背景もわかるセンスのあるキャッチコピー」「安っぽい写真はそれこそ駄目。プロのカメラマンが撮影した写真が必要」「企業が判断するには実績や財源で信頼させなきゃ」など活発な意見が飛び交った。それぞれの班の意見は表 1 のようになった。

次に 5 つの班から上がったキーワードをベースに①企業、②NPO、③つなぐ人のそれぞれの視点からキーワードに対する重要度をつけた(☆3つ、☆2つ、☆1つでランク付け)。立場が異なれば求める情報も異なるはず。と想定してみたものの結果は意外にもそれぞれの立場が異なっても重要な要素は大きく異なることはなかった。その団体の概要や背景を一言で伝えながら目に留まるキャッチコピーであったり、官公庁、大企業との取引実績など読み手に信頼感を与えることが重要というような結果となった。

	NPO	企業	つなぐ人A
	活動のキャッチーなコンセプト	団体のキャッチコピー 演出(物語り・ドラマ)	企業・大学・官公庁との
	一番アピールしたい 専門性・効果	実績	メインセールスポイント
	活動の内容	専門性 演出(プロが撮った写真)	団体のキャッチコピー
	活動 プログラム 例料金例	財源収支	プロの手による写真 or イラスト
	物語 (沿革的な ものも含む)	活動内容	キャッチーな活動コン セプト
	写真・イラスト(活 動・スタッフ・自然)	活動コンセプト	代表の写真入りメッ セージ
	団体の思いや理念	代表者の写真入り意思 表明メッセ-ジ	活動にまつわるドラマ チックなエピソード
	実績	規模(人数) 専従スタッフ数	団体規模
	コンタクトする手順・ プロセス	有名人の(関連団体) 応援メッセ-ジ・コラボ例	第三者推薦コメント(参 加者・著名人 etc)
	ネットワーク(コラボ 仲間・支援団体・加 盟ネットワーク団	ファーストコンタクトか らの手順・プロセス	マスコット・ロゴマーク 関連団体

表 2.1 キーワードの重要度(NPO, 企業、つなぐ人A)

1班	2班	3班	4班	5班
団体の目的・理念	ミスター・ミスNPO	キャッチーな活動コン セプト	代表の写真入りメッ セージ	写真(活動・スタッフ・ 施設・自然)
PR(アピール)ポイン ト	専門性(必殺技)を含 んだキャッチコピー	物語り(ストーリー)・ ドラマ	団体のキャッチコピー	活動実績(企業との コラボ実績)
写真・イラスト	団体のビジョン(精神 的な)	理念・ビジョン	プロが撮った活動例 写真	スタッフ紹介(スタッフ 数・自己PR・etc)
代表のあいさつ (プロフィール)	実績(企業との協働)	活動コンセプト	メインセールスポイン ト	活動内容(得意分野 キャッチコピー・参加
ロゴマーク	ヒト(中心人物)	現場の姿	業務領域	団体理念
ネットワーク(と仕事して ま)	財源(収支)	事業内容	ビックネームとのコラ ボ事例	収支(事業内容)
概略(活動・記録)	ロゴマーク	実績	マスコット	料金例
実績(OOC)	NPO同士のネット ワーク	団体規模	ロゴ	関連団体
対象者・ターゲット (子ども・大人)	顧問・推薦者・役員・ 理事	フィールド	著名人推薦文	CSR担当社へのメッ セージ
フィールド	規模(人数)専従ス タッフの数も	お得情報	活動参加者の声	沿革
スタッフ紹介	活動地域	ファーストコンタクト時 の手順・プロセス		有名人の応援メッ セージ
	今後の展望・方向性			

表 1. カタログに必要なキーワード

つなぐ人Bチーム			
	目に入る(ツカミ)	内容を判断する	実行に向けて
	団体の物語(漫画 家とのコラボ)	専門分野(得意技)	手順プロセス(担当 者 etc)
	アピールポイント	実績(ビッグネーム 含む)	実施もデルの料金 例
	トップメッセージ (写真等)	団体概要 (会員数・収支・ス タッフ数・領域)	
		理念・ビジョン	写真(活動風景・ス タッフ)

表 2.2 キーワードの重要度(NPO, 企業、つなぐ人B)

# どうする!《限界集落》またの名は《上流社会》

実施者: 広瀬敏通(日本エコツーリズムセンター)

「限界集落」もしくは過疎集落、小規模高齢化集落・水源の里・生涯現役集落などについて

「限界集落」って?

- 1991年、高知大学教授(当時/現長野大学教授)が提唱した概念。集落の高齢化率(量的規定)と、冠婚葬祭や伝統行事が集落の力では出来なくなった(質的規定)から、集落の「限界性」に言及した概念。
- 集落を4分類し、存続集落、準限界集落、限界集落、消滅集落の4つとし、大雑把に10年単位で分けている。つまり、10年後には存続集落も準限界化する可能性があり、準限界化した集落は10年後は限界集落となり、さらに10年後には消滅…。『身もふたもない見方』という意見も強い。
- 「限界集落における集落機能の実態に関する調査2005 農水省」では無住化危惧集落は1403集落。
- 「過疎地域等における集落の状況に関するアンケート調査2007 国交省」によると、日本全体の過疎集落総数は62,273集落。65歳以上の高齢者が50%以上を占める「限界集落」は7,878集落。10年以内に消滅の可能性がある集落は2,643集落。
- 65歳以上が50%以上を占める自治体は「限界自治体」(大野晃/長野大教授)

様々な問題

- 2極への格差分化の問題。  
⇒6大都市は人口がますます増え、高齢化率は低い。地方は人口が急ピッチで減少し、高齢化が進む。集落間、自治体間、各県間の格差として法的におきている。
- 『投資効率の悪い地域は衰退消滅しても仕方がない』という意見。  
⇒①伝統芸能、伝統文化の消滅～心の芯を失う問題。②農山漁村の原風景の喪失～日本独特の叙情性にとんだ感性の喪失。③山の環境問題～水源林、国土保安林の荒廃、棚田などの耕作放棄による生態系の崩壊、災害の頻発、資源の消滅の問題。
- 国交省アンケートからの「発生している問題・現象」では、『耕作放棄地の増大63%』『空き家の増加58%』『森林の荒廃49%』『獣害、病虫害の発生49%』『ゴミの不法投棄の増加46%』『土砂災害の発生27%』

- 『山で暮らすより街に下りて生活してもらうほうが医療、介護、福祉面で効率的』という意見。  
⇒先祖代々育ってきた環境との切り離しは大きな喪失感となる。人生や人間関係、地域、社会関係との切断は幸せ感にはつながらない。
- 都市住民の意識。  
⇒無関心、無関係、誰かがいつか問題を解決するでしょう。集落住民の意識⇒数百年続いた集落には強い愛着と誇りがある。でも、現代社会との折り合いは諦めて、息子、孫もこのような集落には引き留めたくない。自分の代で消えていくのは仕方ない。
- 「限界」「消滅」というインパクトの強い言葉によって農山村の現状が見えにくくなっている。
- 手入れされた田畑、あぜ、庭、落ち着いた佇まい、穏やかな表情、スローな時間など、現代社会が置いて来てしまったものがこうした集落には当たり前

限界集落や取組に関する事例紹介

(浜本奈鼓氏、国安俊夫氏、西村仁志氏より)

## ■グループ討論&発表

『限界集落の問題に対し、自分達ができること、やりたいこと』

- ・「限界集落」という問題の大きさを認識する。
- ・まずは知ることから。そして自分の立場に置き換えて考えてみる。
- ・山奥ではなく中間地域に、住み込みという形ではなく、通うという形で。
- ・移住、結婚、IUターン。
- ・若者が来なくなる、帰りたなくなる町づくり。
- ・都会の人が田舎で仕事できる仕組みづくり。
- ・第一次産業の担い手養成
- ・総合的な学習の時間を活用し、地域の魅力を掘り出す(地元学)。
- ・施設、人材、システムなどの状況を明確化し、集落に合ったマニュアルづくり。
- ・外から見た集落を知る→良さを再発見。
- ・まなざしをおくる……ネットワークでパートナーをつくる。
- ……都市型の経済形態では、集落は負け犬に。地域独自のマネー形態を!



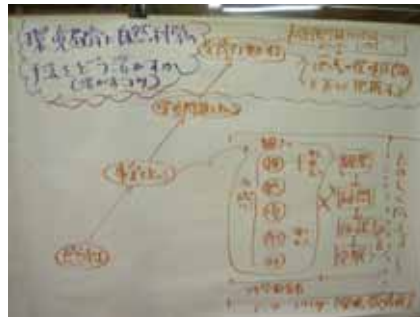
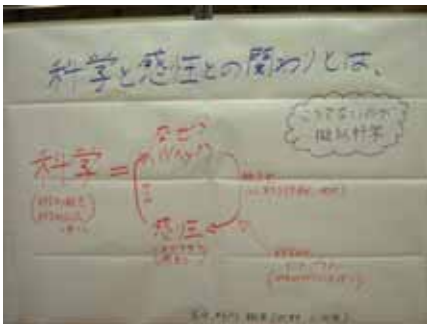
# 科学と環境教育総集編

## 科学と環境教育の関わりを定義する

実施者: 湊秋作(財団法人キープ協会)、北野日出男(JEEF 会長)

小河原孝生(NPO 法人生態教育センター)

河原塚達樹(財団法人日本レクリエーション協会) -



過去 5 回にわたって実施してきた「科学と環境教育」について考えるワークショップの成果を踏まえ、それら総集編としてある種の定義を作成することが目的であった。

このワークショップは、自然体験型の環境教育が感性のみに訴える傾向が強まり過ぎており、もっと自然科学の手法や視点を取り入れた展開を広める必要があるのではないかと、との問題意識からスタートした。

しかし、回を重ねるにしたがい、自然科学と感性を対立的に考えるよりも両者の関わりを自然科学の手法と個人の心の動きとの相互の関係性として捉えるべきことが明らかとなった。「観察→疑問→仮説→検証・反証(観察・実験)」という科学的手法により自然への理解が深まることで深い感動が生まれ、自然への畏敬・愛着を通して、個人のライフスタイル転換を促すのではないかと、同時に問題解決への科学的な取組が可能となる、という考え方である。

一方、ライフスタイルの転換に迫るとは、どのようにして可能なのか。また、その評価方法や宗教、自己啓発セミナーとの違い、さらには世界はどうあるべきかという世界観の違いにまで問題は波及することが浮かび上がり、課題が広がりすぎる危険性も生まれてきた。

そこで、今回のワークショップでは、以下の3つの

テーマについてグループワークによってひとつの答えを出すこととした。

### 科学と感性の関わり

～擬似科学との違いを踏まえて～

### 発見の喜びがライフスタイルの転換につながるステップ(行動化への道)

### 環境教育に自然科学の手法をどう活かすか

アウトプットとしては、模造紙に各テーマへの定義を図示することとし、写真のようにそれぞれまとめられた。残念ながら図の解説をここに述べる紙幅はないが、「②発見の喜びがライフスタイルの転換につながるステップ(行動化への道)」において、無私力(個人の利益追求から離れ、全体の益を考えられる力)や共同化・協同・協働こそが人を行動へと導くキーワードであるというまとめが印象に残った。個人の意志や力には限界があり、行動変容を促すためには他者と関わりながら、ともに何かをなしていくことだという考え方である。互いの自由を認めつつ他者と共感し、時には刺激あいながら意図的な行動をどう進めていくのか、どのような運動にも重要な方法論を環境教育にどう取り入れていくのかが問われていると思った。

なお、上記3テーマについては、本ワークショップ企画者が集まり、さらにブラッシュアップするための検討を行うこととなっている。

# オオバコずもうで勝つ方法！

## 理学系研究室の自然体験

実施者：三浦憲人(富山大学大学院理工学教育部)

### 【ねらい】

- 植物を使った遊び‘オオバコずもう’を通して、難しいと思われがちな大学の勉強を知ってもらう。(対 参加者)
- 大学の研究成果を実際の自然を伝える中にどのように組み込むことができるのかを考える。(対 実施者)
- 環境教育に関係する方の植物に対する理解と疑問を知る。(対 参加者および実施者)

### 【内 容】

自己紹介(10分)

アイスブレイク(30分)

○植物の特徴伝えゲーム

1. 植物を10種類くらい用意する。
2. 集めた植物を参加者全員でどのようなものがあるか確認する。
3. 参加者の中から一人代表を選び、実施者が選んだ植物を見てもらう。
4. 代表は植物の特徴を30秒で紙に書く。
5. 書いた紙の特徴を見て、参加者はどれであるか植物の中から選ぶ。
6. 参加者の人数が少ないときは全員に代表者を一回やってもらう。  
(参加者の状況によって相談して選ぶか、個人で選ぶかはその場で決定。特徴を見つけ・表現するのが得意な人がいれば、全員で植物確認をしていないもので実施すると、相手に特徴を伝えることが難しいので、より選ぶの高度になる。)

### 【目 的】

代表者の言葉からひとつの物を見つけ出すことで、植物の理解を共有することができる。

植物分類の基礎は特徴を見つけ、表現すること。身の回りにある植物を言葉に具体化することで分類学を実感してもらう。

### 【本 編】(1時間(休憩含む))

○オオバコずもうと勝つ方法の選定

1. ルール説明

2. 用意したオオバコの中からひとつ オオバコずもうに勝てそうなものを自分なりに選んでもらう。
3. 実際にオオバコずもうをして、優勝者を決める。
4. 優勝者にどんなオオバコを選んだのか教えてもらう。
5. 実施者のオオバコのある1つの見方を聞いてもらう(染色体数の違いと形の違いについて)
6. 染色体の数の違いでオオバコずもうの勝敗に違いが出るか試してみる。
7. 染色体の特徴によっていろいろなことがわかっている例を挙げる(カキドオシ・セイヨウタンポポ)

### 【まとめ】(30分)

生きものの見方は形や生き方だけでなく、他の見方もある。いろいろな方法(実験)で、生き物を見てほしい。

### 【W.S.実施しての感想】

W.S.実施後、研究に関する質問があり、研究活動により検証されていることがらに関しては答えることができた。しかし、わかっていない部分も研究の中には多数あり、フィールドで活動されている方の疑問から研究テーマとして得られるものもたくさんあることがわかり、得るものは大きかった。

[大学の研究=難しい]という考えを少しでも緩和できるように、フィールドでの生きものに関する疑問を解決する研究者とのつながりが必要であると思う。今回の W.S.実施および清里ミーティングへの参加から、科学的な研究の理解をより簡単に伝えることの難しさを知ることができた。また、科学的な話を理解してもらうために何が必要であるかを考えることができた。

今行われている研究にだけで生き物のことをすべて知ることができるわけではなく、生き物のことを知りたいという思いや疑問が新しい研究のテーマになるはずである。わからないことを知るためのひとつの方法として、研究者とつながり、うまく利用することも必要であると考え。

# 川遊びのルールを広めよう！

実施者：村井孝一(天竜川総合学習館かわらんべ)



『町に交通ルールがあるように、川遊びにもルールがある。この“川遊びのルール”という概念とノウハウを、全国の自然学校または野外活動に携わる皆様と共有することができれば、悲しい川の事故を減らすだけでなく、全国に川ガキを復活させることができるのではないだろうか?』そんな想いで、私は今回このワークショップを企画しました。

川遊びのルールといっても、何も「川のど真ん中」における特別な遊びのための専門知識ではなく、より日常に近い「川岸レベルの川遊び」で求められる基礎知識です。たとえば、川遊びではどんな靴や服を選べばいいのか? ライフジャケットやヘルメットはなぜ必要なのか? といった装備の話から、肝心な「川遊び場」の選び方や判断方法、そして遊んでいる時に起こりうる危険性・注意点などなど、必要な情報を多岐にわたって紹介しました。また、大人・指導者としての視点から、川遊びを実施する際の準備・スタッフ配置・注意点なども紹介。「危ないから」であきらめていたものを「どうすればできるのか」に変えるための安全管理ノウハウを紹介しました。

今回のワークショップで最も苦勞した部分は、「実践」ができないこと。夏であればまだしも、冬間近の清里では川に入る訳にもいきません。その上で、川遊びのルールというノウハウの「知識の伝達」をしなく

てはならない。現場であればまだしも、室内でもなるべくワークをとりいれてゆきたかったのですが…。ただ、私が本当に大切にしていたのは、「ワークショップ後の時間」。「今」を盛り上げて内容が薄くなるより、みなさんがそれぞれの現場に戻ってからの時間が活きるよう、“確信犯的”に「講義形式」を選択し「伝達や解説の時間」を重視しました。テキストを作成したのもそのためです。一般的なワークショップスタイルを期待されていた方には、ちょっとしんどい時間だったかもしれません。ただその分、たくさんのお土産をお渡しできたのではと思います。

昔は川ガキ上級生から川ガキ下級生へと、当たり前のように受け継がれてきた「川遊びのルール」。そんな「川ガキ文化」がほとんど途絶えてしまった今、その役目を大人がやらなくてははいけません。防げるはずの川の事故をなくすために、子供たちが元気に川で遊ぶ景色を取り戻すために。今回使用した「川遊びのルール」冊子2種類は、以下のサイトよりダウンロードすることが可能です。ぜひ、皆さんの活動に活かしていただければ幸いです。

- 「川遊びのルール」冊子 ダウンロード  
<http://www.tenjo.go.jp/kawarannbe>  
天竜川総合学習館かわらんべHP  
(左側のアイコンよりダウンロード可能)



# 日本型、日本的を考える

## ～ 日本的自然観という視点～

実施者：新田章伸・木内功・田島由起子(日本の自然観実践研究会)

山田俊行(トヨタ白川郷自然學校)

### 【ねらい】

環境教育をより深め、私たちの生き方暮らし方につながるものにしていくキーワード「日本の自然観」。その視点から、日本型、日本的をワーク等実践事例の紹介も交え、共に考える。ここから未来へ。

### 【内容】

#### ワーク1「大自然の中の小石」

日本古来の「水石」から創作した活動事例紹介「日本の自然観実践研究会」  
「里山キッズクラブ」

#### ワーク2「日本的な活動を捉えなおす」

そば打ちプログラムを題材に3班に分かれ検討

#### まとめ 「感想・私のこれからの取組み」

※WSの内容はお伝えし難く、テーマの「日本の自然観という視点」について、参加されなかった方にもお伝えしたいという思いから、配布資料の抜粋をもって報告とさせていただきます。(新田)

### 【配布資料 抜粋】

#### I. 自然観は文化である

自然界には多様な生物がいてそれぞれの生息場所において種独自の生き方をしている。その個々の独自性、個性が自然界全体から見れば相互にバランスを持ち互いに支え合い全体自然を構成している。自然界は個性を生きることを求めているものなのである。

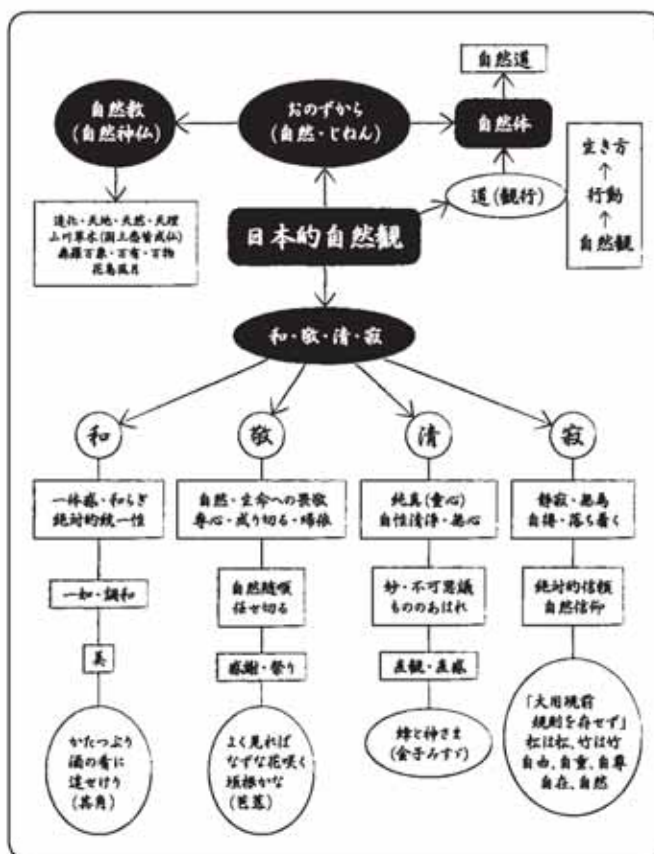
寺田寅彦(1878-1935、物理学者、随筆家)は、「日本人の自然観」(昭和10年)という随筆を発表し、その最後に次のように述べている。

『私は、日本のあらゆる特異性を認識してそれを生かしつつ周囲の環境に適応させる

ことが日本人の使命であり存在理由でありまた世界人類の健全な進歩への寄与であろうと思うものである。世界から桜の花が消えてしまえば世界はやはりそれだけさびしくなるのである。』

日本という風土に根ざした自然の見方は、そこで長年生活し生き抜いてきた民族の歴史であり、財産であり、民族の心であるとも言える。それが文化というものであろう。文化とはその国、その民族の個性なのである。世界が均一化し、同質化していくことは個性を失い、世界が多様性を失うということである。それぞれの国の自然に応じた自然観をもってその国で生きるのがもっとも自然でいいのではないだろうか。個性を生きることの内在的価値、絶対的価値に目覚めることが重要であろう。

(後略)



図説「日本の自然観の心的側面」

# 地球環境カードゲーム マイアースを遊び尽くす

実施者：岡崎雄太(マイアースを開発・起業した慶應大学院生)

齊藤透(教育ゲーム開発集団 GARDEN)、泉谷あずさ(慶応義塾大学)



「地球環境カードゲーム マイアース」～ ついに  
出た！ 環境教育版トレーディングカードゲーム～  
<http://myearth.ne.jp>

**って何？**：今、子ども達が夢中になっている「遊戯王」や「ポケモンカードゲーム」といったトレーディングカードゲーム。そんなに面白いならば、子ども達がせっかくハマっちゃうならばと…それを環境教育版で創ってしまったのがこれです。

まず楽しさから入る…子ども達の食いつきが抜群の…遊びながら学べて、やるほどにハマっていく、雨でも、どこでも、二人からできる環境教育ツールです。

**驚きの画像品質**：画像には朝日新聞社・ネイチャープロダクション等にご協力を仰ぎ、写真を見るだけでも感動するほどのクオリティ。

**ベンチャービジネス**：慶応義塾大学の学生が考案し、スポンサーに大日本印刷を迎えて商品化。既に 2008 年の夏から全国の書店と Amazon で売り出されています。

**効用**：子ども達一人ひとりが、環境問題を「主体的」に「考え続ける」ようになります。 **これホントです。**

一見、地理的にも時間的にも「遠い」感じがしてしまう地球環境問題ですが、ゲームの中で、1枚1枚のカードとカードの「つながり」を考えることで新しい考え方に至り、地球環境と個人の関わり方を劇的に変えることができます。

**使用法**：どなたでも、基本パッケージ（陸・川・海、各¥1,785 のどれか1つ）さえあれば、すぐに始められます。トレーディングカードゲームなんてやったことないという人も大丈夫。とっても簡単です。もちろん大人だってもものすごく楽しめます。

**清里では**：まず1回遊んだ後に、自作カードを加えてもう1ゲーム行いました。（以下、その感想です。）

- ◆カードの効果を把握する上で、温暖化問題の内容にも関心が持てた。
- ◆環境+トレーディングカードゲームという手法は、子どもには確実に受けると思う。
- ◆ハマる小学生の気持ちがわかった。

## 教育ゲーム開発集団 GARDEN

**どんなものでもゲームにします** ゲームを「参加体験型のプログラム」と捉え、開発・普及を行っている集団です。お気軽にご相談ください。

### ゲームを用いた教育プログラムの長所

① 楽しく学べる、② とっつきやすい(敬遠されにくい)、③ 参加型だから能動的に関わる、④ 参加者間に深いコミュニケーション、⑤ 体験型だから印象に残る、⑥ 焦点を絞り込むのでメッセージを伝えやすい、⑦ 体験型なのに場所や天候を選ばない、⑧ プログラムそのものの完成度が高く、施行者のレベルの差は出にくい、⑨ 体験型でファシリテーションが重要という点で、フィールド系でご活躍の方との相性も抜群

### 清里ミーティングでの実績

- ・2003年：「ケミカル 環境版」（投資意思決定ゲーム）
- ・2004年：「エコ六」（JEEF と共同開発した双六形式で環境社会を考えるゲーム）
- ・2005年：「eCO2 FUND!（エコエコファンド）」
- ・2006年、2007年：「スピード・ソリューション 自然学校版」（この他、JEEFの「環境経営戦略ゲーム」の開発にも携わりました。）

# 障害者と共につむぐ環境教育の企画をつくる！

実施者:小林修(愛媛大学農学部森林教育)



昨年に引き続き、障害者とともに展開する環境教育のあり方について考えるWSとして開催しました。持続可能な社会を実現するためには、社会を構成する全ての人々の参画、とりわけ障害者の方々の参画が欠かせません。今回のワークショップでは、持続可能な社会の実現を目指した森林環境教育活動において、障害者と共に楽しみ・学ぶ活動事例について、プログラムや教材について参加者どうして情報を共有し、よりよいモデル企画をつくることを目的としました。

今回のワークショップでは、はじめに、実施者の私から、これまで6年間にわたって展開してきた視覚障害者とともに楽しむ、森林環境教育のプログラムの紹介をしました。またプログラムをつくるにあたって新たに開発した森林環境教育の教材、さわって分かる年輪教材、年輪音楽などに実際に触れ、視覚障害者向けの教材は晴眼者（目の見える人）にも楽しめ、学習動機を高める効果があることを実感しました。さらに、目隠しをして外に飛び出し、暗やみの世界がわずかな時間で我々の視覚以外の感覚を敏感にすることも体感しました。暗やみの恐怖から、新しい感覚で物事捉えることができるようになる喜びとそこから得られる達成感は何にも代え難い体験です。

そして、最後に皆さんと一緒に、障害者とともに分け隔て無く楽しめる環境教育の企画づくりを試みました。企画を作る際には、普段介助される側の障害者が指導者となるように、立場の逆転を狙った企画を意識しました。その結果、車いすによる低い目線からの風景探しや、障害者が主役になること間違い無しのネイチャーアスレチック、ネイチャー鬼ごっこなどの企画が飛び出しました。視覚障害者向けについては、すでにこれまでの環境教育で展開されてきた五感を活用するプログラムに、少し変化を加えて応用する企画がいくつか生まれました。視覚障害者を先生にした、食農教育（味覚）、アメンボ博士企画（嗅覚）、解剖体験（触覚）などが特にみなさんの興味を惹きました。

今回、生まれた企画は、ぜひともみなさんで持ち帰って実行に移していただく事を希望してやみません！みなさんも一緒に、すこしずつ障害者とともに楽しむことのできる環境教育企画を積極的に実践してみましよう！



# 森づくりのための戦略会議

## ～ 行政・企業・NPO の協働 ～

実施者: 田島章次(静岡県県民部環境局自然ふれあい室)

井戸直樹(ホールアース自然学校)



### 【はじめに】

「森づくり」を切り口に、行政・企業・NPOの異なる立場から率直な意見を言い合い、今後の「森づくり」や「異業種間の協働」に向けた課題・解決をさぐりたい。

### 【ワークショップの流れ】

1. 行政・企業・NPOの立場の方に加え、大学教員や大学生など幅広い立場の方が参加した
2. 森づくりのイメージの共有  
植林だけではない、森の中だけではないなど
3. 「森づくり」穴うめワークシート  
日本の森づくりの現状をテスト形式で行った
4. 静岡県での森づくりと協働の現状  
『しずおか未来の森サポーター』『富士森林再生プロジェクト』(田島)により協働とは「引き算をせず、足し算をすること」「否定的な意見はせず、ポジティブな意見で」という話や、『住友林業まなびの森』(井戸)により、協働することで広がる可能性について話した。

### 5. 三者協働の方程式づくり

- ・各グループに分かれての自己分析ワークショップ(長所と短所、できることとできないこと、したいこととしてほしいことなど)
- ・「×」で広がる可能性(×行政、×企業、×NPO)

### 6. ディスカッション(一部のみ抜粋)

- NPOを信頼するポイントはどの企業も悩んでいる。組織の安定性や実績から、人対人のフィーリングや思い、オフィス(自宅)を見に行くや、プログラムをみる、パンフレットをみるなど、さまざま。
- 地域やNPOを利用だけはしてほしい。
- 情報の管理についてはNPO業界全体として専門性を高め、ノウハウを蓄積していく必要がある。広告業界のノウハウが参考になる。
- NPOは「利を求めるのではない」こと。未来の子どもたちのためや、ライフスタイルの見直しなど、とにかくフィールドに来てほしい。
- 行政はどうしても3年で移動がある。人のみでつながることに限界がある。NPOには行の担当者を「教育する」という気持ちで接してほしい。行政は変わるが、NPOは変わらない。
- NPOもボランティアとか慈善活動だけではなく、ビジネスとして活動をする必要がある。NPO自体の意識改革。NPOを見る側も、ボランティアという認識が強いので、横のつながりを強化し、それを変えていく文化を培わなくてはいけない。

### 【実施者の所感】

- ・「森づくり」を切り口に、異なる立場からの意見を聞くという貴重な場となった。協働を考える上では、自分の立場と同様に、相手の立場も知ることが必要と改めて感じた。
- ・時間をオーバーしたがまだ話足りなく、次の日の戦略会議で続きを行った。

---

# 2 日目夜

## JEEFの集い

---

司 会 :	(社)日本環境教育フォーラム理事 中野民夫
岩手・宮城内陸地震の報告	(社)日本環境教育フォーラム理事 佐々木豊志
JEEFの現況	(社)日本環境教育フォーラム理事長 岡島成行

# JEEFの集い

司会：(社)日本環境教育フォーラム理事 中野民夫

このJEEFの集いの1時間は、JEEFの今を知り、今後のことを少しみんなで考えようという時間です。いろんな企画が今たくさん走っていて、いろんな出会いがあちこちで起こっていると思いますが、ここでみんなでこれからのJEEF、こんなことができるのではないかと、Yes, We Can!みたいなことを一緒に語っていこうと思います。今日は語り合う時間が大事と思っています。

今回も初めての方が半分くらいいらっしゃるということですが、ぜひ出会いを中心としたいろんな学びの場である清里ミーテ



ィングを活かしていただきたいと思います。

今日は仲間がここに集うわけですが、この仲間が非常に活きた、大変な状況にも励ましになったという話をきくと聞かしてくれると思います。正式名称が、岩手・宮城内陸地震で大変な被災に遭い、今も復興の真っ最中にあるくりこま高原自然学校の佐々木豊志から、その現場の状況や復興の様子、そしてまた広瀬さん他いろんな方が動いたのですが、どういう仲間たちのつながりがあったか、そんなお話をぜひ聞きたいと思います。

その後、JEEF理事長の岡島成行さんから、今のJEEFを取り巻く社会のいろいろな環境・現状を話してもらって、こんな展望を持っているという話をしていただき、新しい人・古い人、混じりあいながら、JEEFにこんなことができるのではないかということ語れたらと思います。

## 岩手・宮城内陸地震の報告

(社)日本環境教育フォーラム理事 佐々木豊志

5ヶ月前になりますが、岩手・宮城内陸地震の震源域にうちの「くりこま高原自然学校」がありまして、今も避難指示が解除されない状況で、その後どうなっているのかの報告と御礼も申し上げなければいけないと思い、この時間をお借りました。



地震直後は連絡が取れなくなって皆さんにご心配をおかけしましたが、寄宿生・スタッフ当時19名、誰一人怪我なく山を下りることができました。奇跡というか、それが何よりでした。その後、本当にいろんな方々に支えられました。その支えがなければ多分、ここでお会いできなかったのかなと思います。私の自然学校の原点も、ここ清里から15年程前に始めようと思った気がします。これまでも支えられてきましたが、この地震でまた支えていただけて何とかスタートを切ることができていますので、その報告をしたいと思います。改めてありがとうございました。

いたるところ山が崩れています。JEEFの自然学校指導者養成講座3期生の馬渡が、この道を10分前に通って、多分この道を最後に通った人間が彼じゃないかなと思います。今年の夏の授業はおかげさまで中止することなく、全部やることができました。参加人数は少なかったですが、夏の2週間のキャンプも実施しました。

北上川を100km下るといっても、乗馬のキャンプもできました。ヘリコプターでないと行けない状態で避難しましたので、キャンプの道具も実は全部、山に置き去りだったんですね。広瀬さんを通じてコールマンさんがキャンプの道具を支援して下さい、地震の前よりも装備が充実したくらい支援していただいて、本当に感謝しています。予定外のツアーも、震災応援エコツアーということで4回開催しました。

くりこま高原自然学校は、震源域から数キロというところにあります。避難した場所はそこから25キロ程離れた場所です。被害がひどかったのは、くりこま高原自然学校がある耕英地区という山の中で、町場は全く被害がなくて温度差がすごくありまして、避難民とのズレが、後々ボランティアセンターを運営するうえで非常に壁になりました。

耕英地区は何度もテレビに出たと思いますが、イチゴ農家などのいろいろな農家、戦後満州から引き上げた方が入植して、ブナの木を伐採して苦労して開拓した場所です。120~130軒あったのですが今は40軒、その40軒も高齢化して復興するためにどうするかという部分で、なかなかエネルギーが湧ききれないところがありますが、何とか開拓2世3世がいますので、山に戻ろうと頑張っているところではあります。

13年かかって皆さんに応援されて軌道に乗りにかけたのですが、神様にもう1度試練を与えていただいて地震にありました。地震で失ったものは大きかったのですが、得たものもたくさんありました。広瀬さんが取り組んでいるNPO法人日本エコツーリズムセ

ンターの後押しで、せっかくだからツアーを組もうということで、震災応援エコツアーを4回実施しました。不謹慎だという声もあったのですが、どんな崩れ方を、そこで頑張っている住民がどうしているかを住民も呼んで意見交換をして、事実を見てもらいたいと思いました。

自然学校の役割として動いたのは二期目なんですね。ボランティアセンターを立ち上げて何ができるか、というところで動いたんです。今は災害地の片付けと地域のコミュニティの復活のために動くということで、三期から四期に移っているところです。二期の時には、本当にいろいろな方に支えていただきました。今はくりこま耕英震災復興の会という地域の会をつくりましたので、そちらが復興にかけた唯一公式な組織ということで動いています。それまでの立ち上げの部分で、自然学校の役割は一つ終わったのかなと思います。テレビでイワナ農家やイチゴ農家のことをやっていたと思いますが、マスコミが逃げのを何とかい止めなければいけないということで、話題をつくっているいろいろな発信をしました。避難指示で強制的に山から下ろされたのですが、イチゴとイワナを残したまま一時帰宅の時に手に持てる程度ならということでしたので、ここでもいろいろな人に関わってもらいました。イチゴ農家の方にとってみれば、14日に地震があって、16日が今年最初の出荷予定でしたので、それが全部ダメになりました。でもいろんな方にネットワークで応援いただいて、イチゴ農家さんも励まされて、諦めていたのをやってみようということになりました。

まとめますと、今回、私自身が自然学校で子ども達やスタッフに、いつも話していたことが試されたなと思います。私自身は冒険教育から環境教育に入ってきたのですが、子ども達を自然の中に連れて行って、自分で考えて自分で判断して一歩踏み出すという力をつけるために、冒険体験というキーワードを使っていました。そのフィールドが自然の中にたくさんあるということもありました。よく冒険教育ではCゾーンという言い方をしますが、コンフォートゾーン、心地の良いゾーンから出るということが冒険だということなんです。未知のこと、この先結果がどうなるかわからない、誰も体験したことがない、そういうところに自分の意思で一歩踏み出す。避難所はCゾーンなんですね、住民の方にとってみれば安心・安全の場所、我々も避難所に下りました。我々はCゾーンの中でぬくぬくとしていることもできました。でも、

いつも子ども達やスタッフに言っているのは、今何ができるかというところで、明日どうなるかわからないけれど、何ができるか考えて一歩踏み出して、やる。その積み重ねで今回いろいろな方とつながることができたと思います。だから冒険教育をずっとやってきましたけれど、全く間違いなかったな、ということはずごく感じました。

それから皆さんのネットワークですね。本当に支援をいただいたなと思います。私も自然学校を立ち上げる時に、年に1回は頑張ってお清里に来て、それは栄養補給で、元気をもらいにきました。元気をもらってまた帰ってやる。やること自体はこの先どうなるか保証されていないことだったので、そういうのを積み重ねてきました。今回はまさに、皆さんから栄養をもらいながら頑張ることができたなと思います。報告書を作ることができました。支援していただいた方の名簿も全部載せました。こんなにも応援してくれたんだなあと思いながら整理をして、御礼と報告を兼ねて報告書を作成しました。本当にありがとうございました。

**司会：**多くの仲間の支援があったということですけど、中でも真っ先に駆けつけた広瀬さん、メールでどんどん情報が出てきて、二人はどういう関係だったんだろうと思うほど、熱い男の友情を感じたのですが、広瀬さんに一言だけお願いします。

#### **(社)日本環境教育フォーラム理事 広瀬敬通**

今、詳しく報告を聞かせてもらって、本当にここまでやってきてよかったなと思っています。我々が自然学校をやっているというのは、やはりアクションなんですよ。とにかく一歩出て、何かその出たことによって世の中を変える、周りを変えることができると思ってやっているわけで、こういう災害というのは、動くチャンスだと思うんですね。動かなければそれだけのもので、動くチャンスにはとにかく動いてみよう、長年実践を考えてきました。今回は私自身がそんなにたくさん動いたわけではないのですが、実にはたくさんの方に支援カンパなどに応えていただいて、僕らがびっくりするくらい集まって、感涙を流すくらい嬉しい思いをしました。日本は災害大国なので、これから皆さんのところにも必ずきます。みんなで助け合いの持ち回りでやっていきたいと思っています。

## **J E E F (社団法人日本環境教育フォーラム)の現況**

今度の地震で、佐々木さんのところで失ったものも沢山ありますが、私が最初に聞いた時に、まず全員無事だったということ、これは大きいですね。それから佐々木さんの判断が、すごくきれいに上手くいったんですね。物はなくなったかもしれないけれど、佐々木さんの人格、リーダーシップ、そして今いい顔になりましたね。これで得した方が多いかもしれない。世の中の人々が佐々木

#### **(社)日本環境教育フォーラム理事長 岡島成行**

豊志のリーダーシップをかなりしっかりと認めたということは、これから彼が仕事をする時にみんなが信用してくれますね。物理的には大変でしたけど不幸中の幸いで、なおかつ佐々木豊志が一段と男を上げた、なかなかいい結果になってくるのではないかと思います。火事を見ると興奮する人いるでしょ？広瀬さんも、災害で人が困ると興奮するんだね。それでいい方向に流れるので



すが、もうすごい八面六臂の大活躍でした。私たちは20年も前からずっと一緒にやっている仲間で、こういう形でいろいろお互いが再確認できて、非常によかったと思っています。

JEEFの現状ということで、ちょっとマンネリ化しているような状況が無きにしても非ずです。それは何故かという、ここに若い方がたくさん来て下さっているにも関わらず、そういう方々の力を我々が生かしきれていない、というところをちょっと感じました。全体の状況としては、経営的にはまずまずできております。今日は体調を崩して来ておりませんが、大黒事務局長を中心として、運営についてはかなりしっかりした形が出来上がってきました。社会的にも、特に企業からは非常に大きな評価をいただいて、企業の方からこういう仕事を一緒にやっていただけないかと、教えて下さいといったお話が頻繁に来るようになってきました。ですので、ここで手を抜いたりすると大変なことなので、しっかりやろうと思っています。

それからもう1つ、これからのことですが、環境問題がやはりかなり厳しい状況になっています。CO2の問題ひとつをとってもなかなか解決ができない。しかし危機はどんどん迫っているという状況の中で、結局は危機であることを知らないと平気だと思ってしまう。危機であることを知っていれば回避することができる。今どういう状況に置かれているのかきちんとした知識を得る、それが環境教育ですね。これから先の数十年間が人類全体の中でもかなり大きな作業だと、私は思っています。そういうものに今日の仲間の方々も一緒にやろうと言って下さっているのは心強い。特に若い人に申し上げたいのですが、これは男も女も、人生を賭けるに値する作業だと思うんですね。そう思う人は、自然学校でもよし、学校の先生でもよし、サラリーマンでもよし、環

境教育に対してボランティア活動でもよし、自分自身の人生に賭けてもよし、非常に大事な作業だと思いますので、それに関しては胸を張って仕事をしていていただきたいと思っています。

そして最後に、先程も申し上げたように仲間がこれだけいるわけですね。この内の半分の方が初参加の方ですね。後でみんなで話し合ってくださいですけど、仲間なのに、事務局や理事や運営している人間たちと新しく入って来た人たちとのコミュニケーションが少し足りないんじゃないかと、我々は今、反省しているところです。毎年毎年、半分くらいの新しい人が入ってきてくれるのですが、しかしその方たちが一緒に我々と仕事をしていない。毎年新しい人が変わるわけです。その人たちがJEEFのこの仕事をしたいんだ、ある地域でこんな活動しているのでJEEFと一緒にやりたい、もしくはJEEFの仲間として助けてほしい、そのような連携が若干足りないような気がしています。是非今日、この後みなさんと話し合いをしながら、どうしたら皆さんがJEEFを動かせるか、もしくはJEEFの一員として何ができるか、JEEFを皆さんでつくり変えていってほしいんですね。これからは我々が20数年ずっと続けてきたことを、皆さんにやっていただく。どなたでも結構です。事務局に就職するというのも、理事をやるというのも、何でも結構です。是非皆さん、今日は仲間としてディスカッションして下さい。



## JEEF にできること、やりたいこと、YES, WE CAN !

ディスカッションを経て皆様からいただいたご意見をまとめました。

政治家を出す。日本(世界)のしくみを変える。  
行政の環境部門への情報発信！行政が思いっきり少ない。  
行政及び企業への環境教育の新規プログラムの提案。  
シンクタンクをつくって、政策提言。  
ベストセラーの本を出す。(100万部くらいの)  
アイドルを出す！  
小学生の長期ふる里体験生活を引き受ける団体となる。  
日本の取り組みの海外への発信。海外からの方への対応を考えよう。  
Let's Go!! JEEF 祭り。JEEF につないでいる団体が、思いっきり楽しんで遊ぶ環境教育祭りをする!! 各団体で集まって、報告会を行い、表彰する。  
全国の環境教育に興味のある人に「旗」を渡して、それぞれのメッセージを書いてもらう。それをもとに歌や映画を作って見る。  
"環境に関わる教育"のすべての団体(学校、大学、企業含む)にアクセスしていく。インタープリター業界の"一般化"のために。

ネットワーク拡大の資料として、日本各地で活躍している JEEF 会員の活動紹介冊子の発行。清里ミーティング参加者以外の会員(グループ、団体等)も紹介。毎年発行できれば理想的。冊子が難しい場合は、PDF ファイルで配布するか、インターネット公開する。求人情報も紹介。  
正しい知識、情報ネット。子ども達には本当の事を伝えなきゃいけない!でも、知らない事、疑問に思う事が多い。情報は正しくない事も多いし、信じられる人同士の情報ネットが欲しい。コミュニケーション、ネットワーク作りは、とても大事だと思います。さらにその中に、行政や企業の方を多く取り入れ、様々な角度から見る事ができる活動があると良いと思います。  
広げる!環境教育や自然学校なんて全く関心がない層や人々にアクセスする仕組みをつくる。 仲間を限定しないゾ!  
多様な人材の有効活用。  
清里ミーティングに初めて来た人へのインタープリテーションをする。

このミーティングに来ないであろう、トラックの運転手、サラリーマン、主婦などなど、環境教育に関心のない多くの日本人の方に環境教育について興味をもってもらいたいです。何が出来るか、何かしたい(一会社員として)。  
今よりも一回り大きな円で、人を巻き込んだ事業展開をしていく。深く、より「広い」JEEF になっていく。  
ホームページに書き込みページをつくって、情報交換を。  
清里ミーティングのような情報交換(ノウハウの提供)できる機会を。普段、それぞれの場所にいながらでも、気軽に行えるシステムづくり。  
もっと JEEF の名前を広げる。  
「自然学校」をもっともっと厚く広くしよう。  
人材・団体データベースのようなものをつくる。  
情報提供、共有できるネットワーク もうすでにあって知らないだけかもしれませんが…。  
カリキュラムに取り入れて、より多くの対象に広げてゆく。  
最近、地方ミーティングとの連携がないと思うので、地方ミーティングとの連携を密にしましょう。  
首都圏以外での連携の強化キャンペーン。  
地域版・清里ミーティングの開催。  
現在は関東中心の組織と見えます。地方での活動を充実するために、支部を作りましょう。  
各地区ミーティングをやって欲しい。ネットワークをもっと作りたい。他団体の交流会、訪問をしたい。  
環境相談窓口(仮称)が本部だけでなく、地域の拠点がほしい。  
ミーティングを県レベルくらいでやれば、もっとつながるかも。人と社会と地域と自然をつなぎ直す役目の可能性。地域づくりする。  
企業と地域で活動する NPO のパートナーシップのお見合いの機会をもっとつくってほしいです。  
草の根系の小さい団体が活躍の可能性があるような仕組み(制度)づくりをする！まだまだ偏っているような印象がありません。  
情報交換をもっとしていきたい。知らない人こそ知ってもらえる仕組み。  
知っている人だけが有効利用する協会(組織)ではなく、もっと広く一般的な組織になったら、活動の場が広がる！！  
社会へのコミットを忘れずに、日本的なこと、地域的なことにこだわる活動の意義を明らかにすること。  
農民と JEEF がつながってほしい。私はつながりたい。  
日本の農業にもっと幅を。  
地方の農山漁村へのパイプになる。  
現場ディレクターレベルの連携事業をフォーラムで。  
2度目の出会いを作る。またはつながる仕組み。  
体験を深める哲学的な広がりをはっきりさせる。  
JEEF として、JEEF ブランド 一次産業に参入する(農場、物産展、人材育成：ファームインタープリター)。  
都市の環境教育と自然の環境教育のつながりをもっと作りたい。

JEEF の使命は「環境教育」に特化したネットワークづくりだと思います。今後も「つなぐ」役割に徹してください。  
学校と NPO、企業などをつなぐ。参加している教員側は、研究会、教員仲間等に JEEF の情報をしっかり流す。JEEF は、助成金制度、賞などを作る。学校で使えるリストやパンフを作る。金をとってやりたいところに分配(講師料をしっかりと出すために)。GEMS で人を集める。  
「企業との出会いの場」JEEF の存在を知られているのなら、清里ミーティングのことももっと知られるようにするといいいのでは？企業との事業！  
NPO や個人ですばらしい活動をしている人がたくさんいます。そうした方と JEEF が連絡をとるようにしよう。  
民間ならではの、行政の分野を超えた横の繋がりや仕掛けづくり、何かできないですかね。  
さらなる人づくり×拠点づくり(隙間を埋めていこう！いろんな地域に！)×ネットワークづくり。  
若者の参加。  
JEEF にお願ひ！！若者(未経験者)への情報発信。自分のできることは、行動し、伝えること。  
若者(環境教育有識者)を勇気づけ、導くという役割。  
若者フォーラム。現場を知らないけれど、夢を語ろう。  
若い世代がミーティングをやり続ける。  
フォーラムに青年部をつくらう！  
もっと多くの学生が参加できるように、後輩に伝えていきたい。(環境専門で学んでいる人だけでなく、様々な分野で学べる人に来てほしい。)大学側が参加費を負担してくれるとありがたい。学生が参加する際の援助的なものがほしい。(大学側の理解を得たい。)  
JEEF さん cafe 事業やってみたら…？若い人の交流が始まるかも！！僕もやってみたい。  
知れる方法を作る。興味のある人もない人も、JEEF のことや自然学校のことを簡単に知れる(調べられる)方法を作れば、いろいろ広がるのかなと思う。どんな情報が欲しいかは若者から情報を得る。  
大学等でもっと"知る機会"を増やしてほしい。  
インターンシップ。交換留学みたいな。人が動く、情報はついてくる。  
環境、生物、生態学など関連分野の学生に見えるチャンス(インタープリターの経験など)の提供。初心者への相談窓口。  
サミット NGO フォーラムのように、様々な NPO と組んで表に出てみてはどうか？  
環境教育のサミットをしたらどうですか？JEEF 主宰、トップ企業、閣僚、官公庁のトップを集めてフォーラム。  
地域づくりについて政策提言をしたいと考えていますが、どうしたらいいかわかりません。こういうことを考えている NPO は多いと思います。  
もっと人材育成事業を拡充していくことが大切だろう。  
団体間での職員研修の意味での、1年間トレード。  
就職ガイダンス。

プロを目指す若者、自然業界で生きていきたい若者、の職の安定!!ある程度の収入、保証、保険…このままだと「プロ」はいなくなるのでは??結婚・子育て…両立したい!!諦めたくないの、職業としてより充実させてほしい。

ボランティア窓口の拡大化。ボランティアで関われるような活動を提供する。

もっと多くの人に場とチャンスをもっと多くの人を育てて欲しい。実施している内容はすばらしいが、結果もすぐに求めない。(特に自然学校で働くこと。)

日本型環境教育のベースとして、日本人の自然観に基づいた活動を行う時のツボをまとめる。実践しながら整理する。

「場」の特性を活かしてできることをできる人で考え、それを共有化できる環境教育の実例を作り出すこと。

日本的、日本型をもっと深めて考え、広めていきたい。もっとJEEFでも議論の場を作ってもらえたらと思っています。今回の全体会は駆け足だったので…。

環境教育の定着。環境に関わる仕事の認識を高める。

環境教育で飯を食いたい人達に、企業紹介をして欲しい。

清里ミーティングの参加者も、環境を勉強し始めた人から、何年も実践している人もいて、レベルの差、交流力の差があるので、人と人とのインタープリターが必要であると思う。

JEEFとESDを考える!ESDへの積極的な関わり。

理事さんたちの世代交代。私の体力保持。輪を広げて(開けて)広める。

次期理事達の育成が必要。

何かまとまった成果の出るテーマ等で議論すべき。

センス・オブ・ワンダーのみを脱却すべき。

事業に手を出しすぎ。

同じテーマで討議したことは継続してほしい。(企業・行政・NPO)

ミーティングの参加者の数をもう少し増やして、参加費をもう少し下げて欲しい。

中小法人等(NPO法人、個人等)の資金調達のバックアップ(金融機関本部との融資交渉、保証など)ができないか。

JE・EFにする。

大人を対象とした環境教育活動の支援。(子どもはやっているの。)

青少年以外も対象とした環境教育の可能性の検討。(社会人、主婦、高齢者など。)

日本中の自然学校、エコツアー系施設、その他の関連施設すべてのデータベース化。

地球規模的問題意識を芽生えさせる体験学習。

自然科学の知識・手法を活かしたインタープリテーションのプログラムを紹介する雑誌、書籍、Webページ等。

学ぶ場(機会)作り。今回参加してみて、もっとたくさんのことを勉強したいと思いました。

ESDの中で環境教育を位置づけていく。

JEEF should gather and report Japan's knowledge of E.E. And sustainability to the rest of the world.

まずは、自分も環境教育を職として発信する側になる!!

清里ミーティングで学んだことを周りの職員に伝える。

日常の教育活動で、環境教育の視点で発展できる内容であれば、工夫して実践する。

JEEFと企業の握手。そのための道筋作りをやりませう。

JEEF研修生のインターンシップ受入れませう。

"環境"ブーム(?)の世の中ですが、世の中の流れを冷静に見つめて、そこに合った、また補正できるような仕事ができるようになりたいです。



---

# オプションプログラム

---

## 環境教育プレゼンテーション

1日目:11月15日(土)午後 / 八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

/ 清泉寮本館ホール

/ 清泉寮ハンターホール

1日目:11月15日(土)夜 / 八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

/ 清泉寮本館ホール

2日目:11月16日(日)夜 / 八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

/ 清泉寮本館ホール

## 早朝ワークショップ

2日目:11月16日(日)早朝

砂鉄から鉄を作ろう！ 柏崎の製鉄遺跡と自然のかかわり

映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー

清里の森で宝物発見

3日目:11月17日(月)早朝

ロシアから渡ってきた鳥と会いましょう

映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー

清里ミニガイドツアー



---

# 環境教育プレゼンテーション

---

1日目：11月15日(土)午後 会場：八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

---

## 「歳時記に学ぶ 里山の学校」日本の環境教育事例紹介

実施者：新田章伸（NPO 法人里山倶楽部）

内容：環境教育を生き方、暮らし方に結びつく段階まで深めていく為には、私たちが暮らし活動する日本の自然、文化、価値観を再認識することが必要に思います。日本の環境教育の実践事例として紹介しました。ここから未来へ。

## ヒトも生きものも「田んぼでがんばープロジェクト」

実施者：猪谷信忠（せら夢公園自然観察園）

内容：ヒトも生きものも絶滅危惧の中国地方の中山間地域で頑張る“がんばー”（広島県の方言で“わんぱく”の意味）な取り組みを紹介しました。ピオトープ、環境保全型農業、田んぼの学校、地産地消・・・地元の文化を尊重しながら。

## 環境に携わる方の基礎知識『旧暦』...の超入門講座

実施者：齊藤 透（月の会・東京）

内容：旧暦の科学レベルは西暦と同等...いえ、自然のサイクルを表すという点では西暦を凌駕しています。その証拠に、海・島・川・農業・林業で暮らす方々は今でも旧暦を使っています。知ってしまえばとても簡単に楽チン、身体のサイクルにもじっくり馴染み、自然を身近に感じられる素敵なツールです。昼と夜の二倍楽しめるのもお得。

## 「川遊びのルール」を広めよう

実施者：村井孝一（天竜川総合学習館かわらんべ）

内容：町に交通ルールがあるように、川遊びにもルールがあります。今回は、これから川の活動を始めたいという方にぜひオススメの、誰もができる「川岸レベル」における川遊びに必要な安全管理技術のいろはをお伝えしました。

## ダンゴムシレース大会 in 米子水鳥公園

実施者：桐原佳介（財団法人中海水鳥国際交流基金財団）

内容：米子水鳥公園では、子どもたちに大人気の身近な生きもの「ダンゴムシ」の面白い性質を利用した、「ダンゴムシレース大会」を開催しました。面白い性質って何？どんなレース？皆さんの「何だろう？」にお答えしました。

## 免許皆伝！もったいない名人～江戸の村人の巻～

実施者：園田貴史（国立大洲青少年交流の家）

内容：生命の源である「食」。1841年築の伊予の大庄屋を舞台に、伝承されてきた食の知恵を学び、「もったいない」精神で現在の生活を見直す。高校生と小学生との異年齢相互体験事業を環境教育の視点から報告しました。

---

1日目：11月15日(土)午後 会場：清泉寮本館ホール

---

## 地球環境×トレーディングカードゲーム＝環境教育

実施者：岡崎雄太（マイアースを開発・起業した慶應大学院生）

内容：地球環境と個人の関わり方を、「トレーディングカードゲーム」というツールを使うことで、劇的に変えることができます。地理的にも、時間的にも「遠い」問題である地球環境問題。1枚1枚のカードとカードの「つながり」を考えることで、新しい考え方を提供します。

## 「省エネ回転寿司」ゲーム アイスブレイクに使えます

実施者：森 高一（アーバン・コミュニケーションズ）

内容：東京ガスで制作した「省エネ回転寿司ゲーム」。「省エネ」と「回転寿司」にどんなつながりが？こんなツールがあるのか？想像を、多分超える、新たなアイスブレイクがここに。ゲームを体験いただきました。

---

---

### 小学校の総合的学習における森林環境教育プログラム

**実施者：**佐藤敬一・麻生崇志（東京農工大学農学部）

**内容：**平成 19 年度に稲城市長峰小学校 5 年生の総合的な学習として、森林や木材、地球温暖化、カーボンニュートラルなどを理解する森林環境教育プログラムを、大学生をリーダーとして行った報告をしました。

### パワーではない、「紙芝居」というプレゼン手法

**実施者：**川嶋 直（財団法人キープ協会）

**内容：**つい内容を盛り込み過ぎてしまう。聞いている人も居眠りばかり。そんなパワーポイントによるプレゼンテーションの限界を、アナログでライブな「キーワード・ホワイトボード・マグネット貼り付け方法（通称：紙芝居法）」で解決！

### 環境教育と映像コンテンツその現状と課題

**実施者：**菅山明美（NHK エンタープライズ）

**内容：**環境教育の映像コンテンツはざっと数えただけでも 3,000 本ありました。しかし、それらが教育現場で使われているという話はあまり聞いたことがありません。なぜか。その理由のひとつは、教育現場でほしい映像コンテンツを、映像制作現場がちっともわかっていなかった！ということです。それでは、教育現場で求めている映像コンテンツはどんなものか。インタビュー GTA 分析で、結果をまとめました。

### メディアを活用したリフレクション

**実施者：**中西紹一（プラスサーキュレーションジャパン）

**内容：**環境教育プログラムを、デザインされた一つの「ワークショップ」と捉えた場合、そのプロセスがどのような要素で構成されているのかを検討し、かつその中で Reflection（振り返り）の重要性について考察しました。また、その際に、デジタルメディアを用いた Reflection（振り返り）の可能性について言及しました。

---

**1 日目：11 月 15 日(土)午後 会場：清泉寮ハンターホール**

---

### J-POWER エコ×エネ体験プロジェクトの御紹介

**実施者：**好川 治（J-POWER）

**内容：**平成 18 年度より開始した J-POWER の社会貢献活動です。KEEP 協会との協働による体験型エネルギー環境学習の取組みで、人の暮らしとエネルギーと自然のつながりを体感してもらうことをねらいとしています。

### 限界集落で活動する自然学校の事例

**実施者：**大西かおり（NPO 法人大杉谷自然学校）

**内容：**50 年前は大杉谷地域の中心地に位置していた当校は現在、地域の最奥部となりました。これまでに多くの集落が既に消滅しました。集落が消滅してどんな不利益があるのでしょうか？集落維持の意味について考えます。

### 温暖化防止には、“つかって、そだてる！”森づくり

**実施者：**木俣知大（社団法人国土緑化推進機構）

**内容：**地球温暖化防止のマイナス 6%のうち、3.8%が森林による吸収が目指されていることを、ご存知ですか？この目標達成のために重要な、森林や木材を賢く“つかって”、適切に“そだてる”森づくりの循環を促進する新たな国民運動をご紹介します。

### 森林環境教育に関する静岡県の取組

**実施者：**田島章次（静岡県県民部環境局自然ふれあい室）

**内容：**静岡県では、森林環境教育の取組みを NPO や行政、地域、企業などの協働により進めています。特に、企業の CSR 活動を森づくりに結び付ける取り組みの中に森林環境教育への支援メニューを盛り込むことで企業との連携を促進しています。

---

### 社会人英語学習者を対象としたESD教材の開発

実施者：猪俣佳瑞美（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科）

内容：ワークショップにおける「つくって、さらして、振り返る」というフレームワークと、英語教育におけるタスクベース教授法のフレームワークには共通点が多い。これらを融合させた社会人英語学習者向けESD教材開発に関する報告をしました。

### 愛媛大学瀬戸内環境ESD 人材育成の3年目の挑戦

実施者：小林芽里（愛媛大学環境ESD）

内容：山～里～海～人をつなぐ持続可能な社会づくりを担う指導者育成に2年間取り組み、カリキュラムづくりの課題、大学と地域との連携を目指したインターンシップの成果、ESDの今後の展望について報告しました。

---

1日目：11月15日(土)夜 会場：八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

---

### 屋上ビオトープでのインタープリテーション

実施者：小林美穂・児玉未央（東京ガス環境エネルギー館）

内容：環境エネルギー館は工業地帯にある都市型環境教育施設です。屋上にあるビオトープでのインタープリテーションと共に、開館からの10年間の移り変わりや、多面的な機能についてご紹介しました。

### 環境の本質からアクションにつなげる大袋東小の教育

実施者：寺田正伸（埼玉県越谷市立大袋東小学校）

内容：企業やNPO、行政や地域の方の力を借りて、全校で環境の共通体験を行うことで、調べ学習に終わることなく自らアクションを起こす子の育成を目指している大袋東小の環境教育。皆さんの力を借りてさらに質を高めていきたい。

### 小学校での環境教育～隙間の時間で伝えていく方法～

実施者：馬場雅子（横浜英和小学校）

内容：基礎学力の低下が叫ばれる中、『環境教育』の時間を特別に取ることはできません。そんな中、社会・国語などの隙間の時間を使って、5・6年生の子どもたちに伝えた実践を報告しました。

### ビデオ：小学校4年生の劇『今、わたしたちにできること』

実施者：馬場雅子（横浜英和小学校）

内容：みなさんは、絶滅した動物をどうやって生き返らせるのか、知っていますか？～中略～ 地球温暖化とは、まるで「地球が燃えている」ようなもの。その火を消すために、私たちができることは何でしょう。子どもたちは、森の妖精たちに連れられて、「わたしたちにできること」を探しに旅に出ました。

---

1日目：11月15日(土)夜 会場：清泉寮本館ホール

---

### 虔十の林～「ほんとうのさいわい」を自然から学ぶ～

実施者：萩岡真美（虔十の会～ケンジュウノカイ～）

内容：虔十の会は大量生産・消費・廃棄による経済成長とは別へ向かい、主に圏央道から高尾山を守るべく様々なフィールドに飛び出し活動中。多様なアイデアと軽いフットワーク。すっごく真剣だから楽しい、そんな会です。

### 「持続可能な暮らし方」をテーマにした活動の展開

実施者：梅崎靖志（柏崎・夢の森公園）

内容：柏崎・夢の森公園は、自然と調和した「持続可能な暮らし方」をテーマにしたちょっとユニークな公園です。開園2年目ではありますが、「持続可能な暮らし方」をテーマにどのような活動を行っているかを中心にご紹介しました。

---

---

### 子どもの建築・まちづくり分野における「環境学習」

実施者：深津真理（子ども建築研究会）

内容：机上の模型から実寸の森の中まで。子どもたちによる建築デザインやまちづくり学習の概要や具体的事例を紹介。初めてお知りになる方も関心をもてるよう「人工」に限らない環境教育との共通点にも触れました。

### 自然学校×地域 ～ホールアース自然学校の取り組み～

実施者：井戸直樹（ホールアース自然学校）

内容：ホールアース自然学校での地域での取り組みの紹介。「都市と農村」「自然と子ども」「自然と大人」などをつなげる役割を中心に紹介しました。

---

## 2日目：11月16日(日)夜 会場：八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

---

### 北欧スタイル「放課後・まちなか・農体験」

実施者：鈴木 曜（スウェーデン・ルンド大学院 LUMES）

内容：サステナビリティの先進国スウェーデンから、街の中で羊やニワトリ、ウサギを飼う子どものための放課後施設の事例を紹介しました。

### 1%の向こうに見えるまちづくり

実施者：長沼 明（環境カウンセラー千葉県協議会）

内容：地域づくりの主体であるボランティア団体やNPOなどの活動に対して、個人市民税納税者等が支援したい団体を選び、個人市民税額の1%相当額等を支援できるものとする全国初の制度を紹介しました。

### スズメやカラスから、地球と地域と自分を知る

実施者：安西英明（財団法人日本野鳥の会）

内容：あなたは自分自身、ヒトという動物についてどこまで知っていますか？ 鼓動は何回？ 手足はいつできた？ 見分けられる人が少なく、謎や不思議に満ちた身近な鳥を通して、考える時間にしました。

### お休みスライド

実施者：財団法人キーブ協会

内容：清里の四季を音楽とスライドでお楽しみいただきました。

---

## 2日目：11月16日(日)夜 会場：清泉寮本館ホール

---

### 自然も社会も！総合的な地球市民アワードの紹介

実施者：高野孝子（エコプラス）

内容：環境だけではなく、文化や生活とつなげる一助となる仕組みをご紹介します。みなさんもぜひ取り組んでみてください。

### 能登里山里海半島の可能性

実施者：細谷樹史（金沢大学能登里山マイスター養成プログラム）

### 里山里海の再生へ向けた能登里山マイスターの取組み

実施者：宇都宮大輔（金沢大学能登里山マイスター養成プログラム）

内容：2008年10月に金沢大学「能登里山マイスター」養成プログラムが開講1周年を迎えました。地域創成人材創出拠点の形成を目的とした文部科学省からの委託事業である当プログラムの1年間の取り組みや課題、これからの展望などを紹介しました。



---

### ツシヤママネコを題材とした環境教育の実践

実施者：上山剛司（対馬野生生物保護センター）

内容：「えっ、イリオモテヤマネコ？知ってるよ！」いえいえ違います！日本には国境の島・対馬にもう一種類ヤマネコが生息しているんです。今日は、絶滅が危惧されているツシヤママネコを題材とした環境教育の実践について報告しました

---

## 早朝ワークショップ

---

2日目：11月16日(日)早朝

---

### 砂鉄から鉄を作ろう！

柏崎の製鉄遺跡と自然のかかわり

実施者：梅崎靖志（柏崎・夢の森公園）

内容：柏崎・夢の森公園の隣接地に、東日本最大級の製鉄遺跡があります。周辺に広がる薪炭林、良質の粘土、海岸の砂鉄を利用して平安時代から鎌倉時代の初期にかけて製鉄が行われていました。今回は、柏崎の海岸の砂鉄を使って製鉄のミニ実験を行いました。作った鉄は、お土産にお持ち帰りいただきました！



---

### 映画「西の魔女が死んだ」

おばあちゃんのお家ツアー

実施者：新田章伸（NPO 法人里山倶楽部）

案内人：山本 真（財団法人キープ協会）

内容：映画化のためにキープ協会内の森に建てられたオープンセットを訪れ、その物語のところに触れ、ゆったりした時間を過ごしました。自然と調和したおばあちゃんの暮らしを体感しました。



---

### 清里の森で宝物発見

実施者：中川祐治（愛媛大学）

内容：頭も体も目覚めていない寒い朝ですが、清里の森でネイチャーゲームを通して 自然の宝物を発見しました。



---

### 3日目：11月17日(月)早朝

---

#### ロシアから渡ってきた鳥と会いましょう

**実施者：**安西英明（財団法人日本野鳥の会）

**内容：**冬鳥など清里のいきものを観察しながら、持続可能な楽しみ方としての自然観察の極意をお伝えしました。



---

#### 映画「西の魔女が死んだ」

##### おばあちゃんのお家ツアー

**実施者：**新田章伸（NPO 法人里山倶楽部）

**案内人：**山本 真（財団法人キープ協会）

**内容：**映画化のためにキープ協会内の森に建てられたオープンセットを訪れ、その物語のところに触れ、ゆったりした時間を過ごしました。自然と調和したおばあちゃんの暮らしを体感しまし



---

#### 清里ミニガイドツアー

**実施者：**財団法人キープ協会

**内容：**せっかく清里まで来て、森の中を歩かずに帰るなんてもったいない！ちょっと寒いけど、それもまた、清里の自然が見せてくれる顔のひとつ。キープスタッフが、みなさまを清里の森へご案内しました。

---

# 3 日目

## 全体会・開会式

---

司 会 : (社)日本環境教育フォーラム理事 佐藤初雄・若林千賀子

全体会

テーマ別「今後の戦略会議」報告

閉会式

閉会挨拶 : (社)日本環境教育フォーラム理事 徳永 豊

# 3 日目 全体会

司会: (社)日本環境教育フォーラム理事 佐藤初雄・若林千賀子

これから全体会を行います。各戦略会議でいろいろ話がされたと思いますが、その議論の経過やあるいは全体にこんなことを伝えたいんだ！ということがございましたら、会議の中から発表いただきたいと思います。



## テーマ別「今後の戦略会議」の報告

### 環境教育超初心者のための「自然のつたえ方」

発表者：柴崎文一さん

昨年・一昨年と参加させていただいて、初心者の方って実はたくさんいらしてるんですね。この世界の初心者なので戦略会議と言われても・・・と3日目の午前中にお帰りにになってしまう人をちらほらと見かけ、そんなもったいないことではいけなないと思いました。僕には能がないものですから、湊先生をお願いをして、超初心者に声をかけたらいっぱい来ていただきました。湊先生に森の中でインタープリテーションしていただきました。そしてアクティビティをして帰ってきて、実は一番楽しい時間を僕達は外で過ごしてきたんです。帰ってきてから湊先生にどんな思いで環境教育をされているのかというお話を聞いたら、なんとスライドトークを見せていただいて、すごく幸せ。でも中味はやはり、いろんなことを考えなければいけない。宿題も頭の中にたくさんいただいて、湊先生に感謝をして、それからそういう体験を持たせてくれた自然に感謝をして、僕達の時間は幸せに終わりました。

### 限界集落と日本の自然観 たとえばエコツーリズム・グリーンツーリズムは日本のか？

発表者：新田章伸さん

昨日の午後、限界集落と日本の自然観というワークショップが別々にあったのですが、お互いあっちに行きたかったということが積もり積もって、一緒にやろうということになりました。まずは限界集落とエコツーリズムについて、広瀬さんから昨日のものや新しいものを使ったりしてお話をいただき、大杉谷自然学校の大西さんから限界集落でのエコツーリズム事例などをお聞きしました。その後、日本の自然観や日本型環境教育をやると、ついついそのうちやって終わりとか、民泊すればいいのかみたいな・・・。じゃ民泊するって何を伝えるのかといった具体的な事例を基に、それからどうするとちゃんといろんなことが伝わるのか、何を大切にするのか、という話をディスカッションしました。日本の自然観とか日本型って何だろう？って、とても難しいと思うのですが、ぜひ今回、日本型環境教育がテーマでしたので勉強していただければな、と思います。

### 企業のための環境NPO カタログ編集会議

発表者：中西紹一さん

実際にカタログを作ってみようということで、昨日から続きでワークショップを行いました。昨日は環境NPOとつなぐ人と企業の人たちの混成チームで、まずどういう項目が必要なのか、10項目挙げました。つまり項目出しをすることによって、重要な情報がどういう所にあるのか俯瞰してみたわけです。項目出しでは、やはり思いが重要だということが企業からも出てきたりしました。その次に、つなぐ人・企業・NPOとチーム分けをし、実際に項目を絞って、星3つが絶対重要、2つがまあ重要、1つはあったらいいねというところです。結構、つかみで、団体の物語、その生業に到るストーリーみたいなものが重要だという話が出ていました。団体のキャッチコピーから入っていった方がいいとか、いろいろ項目を出しました。今日は、それをベースに工夫しあって見開きのパンフレットを作ってみました。基本的には、コミュニケーションの戦略を作る場としてコラボレーションも必要なのかなというのがよくわかりました。

### NPOで(環境教育の世界で)働くということ

発表者：太田衣美さん

私たちはNPOで働くというよりは、環境教育の世界で働くということについて話し合いました。社会人4名、大学院2年生4名、大学1年生1名の9人で話し合いをしました。まず自己紹介をして、大学生は将来の思いとか何故ワークショップに参加したかなどを語っていただき、社会人の方は、今までの多様な人生経験を学生にわかりやすく話していただきました。そこからNPOとは？とか、社会の実体とか裏話をたくさん聞いて、社会はこんなに怖いんだよということを刷り込まれながら、それでも楽しいことをやってたらいんだよ、ということをとくさん教えていただきました。そこで最後に、集まった学生に必要なことというのが出て、みんな行動に移す前に頭で考えてしまうよねということで、まずは考えるより先に行動をしよう、そこから何かが始まりますということが出て、みんなすっきりしたかんじで終わりました。就職できるように頑張りたいです。



## 企業で働く人・大学生など通学者・一時的にその地域を訪問する人たちに対して、どのように環境教育を提供したらいいでしょう？

**発表者：八木和美さん**

私は東京都千代田区で今年できたばかりの団体で働いています。千代田区は人口が46,000人、中間人口という大学・企業に通う人や訪問する人などを含めると、ほぼ100万人の人が毎日訪れる街です。それで普通の自治体のように住民に対して環境に配慮した行動をしていただくのではなく、そこに訪れる人に対して、どのようにしたら環境に配慮した行動をしていただけるのかということテーマにしました。集まって下さったのが沖縄の方お二人で、一時的にその地域を訪問する人に対して、どのように環境教育を提供したらいいのでしょうか？という話をしました。沖縄は観光客が増えすぎてブームになった所で、昔の静かな地域を取り戻したいねとか、そういう形になりつつあるというお話を伺いました。私は四国の片田舎に東京の学生を連れて行って、そのきっかけは、要するに訪問する人の意識が変わらなければ、その地域というのは変わっていかないのではないのかということ、共通することがあるのではないのかと思います。話を進めていきました。最終的には何故か、最初に旅行などで少し意識の高い人が訪問した際に、現地の人がお土産に一工夫して、例えば沖縄なら、サンゴちゃんすこうとかにして、日焼け止めがどのようにサンゴに影響を与えているかとか、そういう知識を与えていき、東京に戻ってからそれをきっかけに企業の環境教育がスタートしていく。他にも、地域の方は地域のブランドをどういうふうにしていこうか、もっと相乗効果があるといいですね、という話で盛り上がって、かなり充実した話し合いができたと思います。

## 東京(周辺)でやる環境教育ミーティング

**発表者：森 高一さん**

7人が集まりました。企画ものなので今流行のKP法でやろうと思います。1つ、現実的にいきましょ、本当にやりましょということで、アイデアとしては、関東ミーティングを移行するというやり方をしたらいいのではないかと。それは拠点担当者を集めて、ノウハウを見せ合いましょ。で、どっぶりミーティングです。今は群馬だけでやっていますが、ゆくゆくは牛久、日光、赤城、千葉、大宮、横浜あたりで持ち回りでやったらどうだろう。メインになったのは、やはり東京ミーティングを開こう。それは大当たりで、企業をどんどん巻き込もう、マスコミ・新聞社を味方にしよう、学生はスタッフになってもらおう、というアイデアが出て、ここでは、学生・行政・企業と、皆さんのようなガッツリ系をミックスしてやろう。もう1つのアイデアで、これは絶対できるかなと思うのは、お金と時間を持っている団塊の世代の分科会+ご長寿世代の分科会をやり、そこに若者が聞き役に入ろうということで、この3種類の東京周辺のミーティングができるのではないかと。関東ミーティングを移行する、東京ミーティングを行う、団体の世代以降と若者のミーティングを行う、その3つを是非実現したいと思います。

## 行政・企業・NPO 協働のためのぶっちゃけトーク

**発表者：井戸直樹さん**

昨日の午後のワークショップで、森づくりの戦略について、行政・企業・NPOが協働でできることを考えようというテーマで行いました。まだまだ話し足りないという要望もあったので、ここで時間を取らせていただきました。いろいろな立場の方に集まっていたので、行政・企業・NPOでそれぞれの強味・弱味をいろいろ出していただきました。求められているもの求めているものを出してもらって、発表しあい、お互いにこどうなってるんだろ、ということいろいろ話しました。これはもう元からまとめる話ではないのですが、通常の業務ではなかなか聞けないような話もいろいろ出て、とてもよかったなと思っております。例えば、行政の話で言いますと、財政難でどこも行政が企業にお金をたかりすぎるんじゃないか、というような話もあって、そういうことへの対応策だとか、NPOが企業とやっていくうえで、やはりはじめの信頼関係というのが一番ネックになるよという話では、信頼関係を得るためのポイントがいくつもいくつも出ました。実績的なこと、経営的なこと、いろいろ出ましたが、人とのつながり、信頼性のつながり、それから思いが一緒、そういうところがやはり強いなということ。だけどNPOは思いが強すぎる、思い込みが強すぎるという意見も出ていて、お互いの立場の認識が必要だなと思いました。信頼関係の人づくりというところで、この清里ミーティングはとても重要な位置を占めるなと思って、いろんなつながりができたことがよかったなと思っています。最後に三者だけでなく四者、フリーターの立場ということで、また大きな役割、フリーターの現状なども踏まえて、社会的な話のできたのでよかったと思います。

## 学校で(と)環境教育やろうよ！

**発表者：飯沼慶一さん**

小学校・大学の先生、NPOの方、科学館の方、学生の方など12の方が集まりました。まず最初に、外でゲームを2つやりました。環境教育のアクティビティというのは、実はネタを変えれば国際教育になったり、人権教育になったり、できますよという話もしながらしました。その後、自己紹介がてらデートゲームをしました。人数の都合で普段より時間がかかって大変でした。ただ、すごくよく喋れたということで、コミュニケーションを取ることではよかったのかなと感じています。それから小澤先生がいらしてたので、小澤先生からプリントをいただいて、環境教育展開への指針というものと、学校への提言について説明していただきました。その後に話し合い、地域のこと長期宿泊のこと施設のこと、1つ面白いのは、東京ガス環境エネルギー館は川崎の小学校を全部回って、実際に対面でやっていくのがいいのではないかと案が出てましたので、たぶんエネルギー館の方はしてくれと思います。楽しみにしています。

## 持続可能で災害に強い復興

発表者：塚原俊也さん

昨日の広瀬さんの限界集落のワークショップを受けて、僕達は震災を受けてどう復興するかについて、限界集落もしくは予備軍の地域であるくりこま耕英地区を具体的な題材として、地震をマイナスに考えずに、チャンスと思って夢を持ってどう頑張るか、というワークショップを開きました。結果として、くりこま高原自然学校耕英地区を中心にエコビレッジという視点で2グループ、もう1つはもうちょっと里山まで広げたエリアでくりこまとしてどう盛り上げるかという視点で、3グループで3つ集約しました。女性・子どもが元気でなくてはいけないのではないかと、たぶん田舎は今後都会が食糧がなくなって疎開先になるだろう、そういう時に田舎は強みをどう生かすかという視点もあったと思います。エコビレッジ・フラクタル型といって、地震を機に自然学校3つの拠点ができました。その3つがどう関わって地域を盛り立てるか、図式化しました。もう1つは、地域の3点をつなげてどうやるかという視点で行いました。最後に震災を受けた持ち回りでいきたいと思いますので、夢をもって、仲間と一緒にいるというのを強みに、皆さんで頑張りましょう。

## 川の危険な流れ DVD

発表者：北川健司さん

私たちは川の流れの中に潜む危険というのは、文章とか言葉とかではなかなかわからないということで、今年ずっと夏に全国の河川での死亡事故現場、長良川や京都の保津川、四国、熊本の白川などを取材してそれをDVDにまとめました。穏やかな流れの中に潜む危険とかを映像で見ってもらうために、水中カメラマンが流れの中に入って実際に引き込まれる様子や、渦の中で回される様子など撮影したものがああります。それは河川整備基金をいただいでいて、僕はその粗編集のものをどうしても帰るまでに見なければならなかったで、この時間をお借りしました。参加していただいた若い2人の学生の方が、1人は都市生活者であまり川で遊んだことがない、もう1人は山の中で育っていて、ガキ大将で子どもの頃は溺れた経験もあるという、典型的な違うタイプの2人でした。それからこの清里周辺で活動されている美しい女性の方で、森だけでなく川の方にも行ったりしている方と、この助成金を出して下さっている団体の方に参加していただいで、理想的なメンバーでDVDを見ながら、実感として次にどんなものを作りたいかという話をしました。そこでは、実は日常の中にもいっぱい潜んでいるリスクがあるとか、文章で作った河川環境管理財団の立派な川のリスクのテキストがあるのですが、カラーの絵を見ても文章を見ても実感が湧かないけども、DVDではすごく実感が湧いたから、じゃあそれを映像化しようかということで、来年も河川整備基金をいただけるようによろしくお願ひします、ということで終わりました。

## 施設展示インタープリティブデザイン ECO-NAVI

発表者：田森夏奈さん

今回はビジターセンター、ネイチャーセンター、展示、インタープリティブデザイン、インタープリテーション、といったことに興味がある方12人で集まらせてもらって、ワークショップを行いました。今回のテーマはノンパーソナル・インタープリテーションって何だろう？でした。これは人を介さずにインタープリテーションということで、ビジターセンター等の展示物だけを見てもらったりするようなことを指します。そのことについて話し合ったり、もう1つインタープリティブデザインとは何か？ということについて話をしました。まとまったことは、ノンパーソナル・インタープリテーションというのは、まず何を伝えたいのかという意図が大切だねということ。その根底に伝えたい思いというのがあると思うのですが、それも大切にインタープリテーションをやっていこうということです。また、ノンパーソナル・インタープリテーションと同様に、人を介すインタープリテーションにも思いが大事だねということです。

## 若者の会 ~オレ達がんばらねば！~

発表者：田原耐之さん

昨日の夜、若者集まれ！といってガヤガヤやっていたあの集まりです。発起人のOBS・河合宗寛さんが昨夜でお帰りになられたので、僕が代わりに発表させていただきます。今、若者たちがこれから何をしていきたいか、そして若者が本気になれることは何なのか、ということをお30~40名で話し合いました。それは地域の活動を本気でやっていきたい、人とのつながりを本気でやっていきたい、自然が好きで山が好きで自然に対しての本気など、いくつかに別れて話し合いました。話のまとめまでできなかったのですが、せっかく若者で集まったのだから、このつながりを大事にしていきたいじゃないか、まずつながりが大事になってその後に発展していく、夢とか希望とか大きくなっていく、そのためには自分達のつながりを大事にしよう。ということで、この集まりでmixiでコミュニティを作って意見交換をしよう、メーリングリストを作って意見交換をしよう、アナログですが所謂交換日記ということが出ました。とにかくつながりを大事にしよう、というこの3つの案をこれから行っていきたいと思っております。時間を割いていただいでありがとうございました。

**司会：**今、若者の会で、「本気」というのがありましたが、その前に「やる気」というのがあって、その前に「その気」という3つの気があります。そういう話をしていたら、その「やる気」の前にまだ気があるんですよという人がいて、「すき」なんだそうです。すきがあってやる気があってその気になって本気になったら、その後もまた気があるんですよって。何だと思ひます？ やってる人は「元気」になるんですよって！いいじゃないですか、使ってくださいよ、これ。すき やる気 その気 本気 元気の5つの気です。

# 閉会式

## 閉会挨拶

皆さんお疲れ様でした。山口県から来ました理事の徳永です。私は今年でこのミーティング16年目になります。しつこく来たなと、自分で自分を褒めてやりたいです。

総括をさせていただきます。昨年の参加者データを見させていただいて、20・30代が58%くらいいらっしゃいました。今年もほぼ同率ということで、かなり若い世代の人たちが清里にやってきているなぁと感じました。初参加の方も昨年42%、今年49%ということで、半分くらいの初参加の方がいらしています。私も実は毎年ここでしか会わない方(まるで織姫・彦星のような)、でも今年会えない方が結構いらっしゃいまして、少し世代が変わりつつあるなぁと感じている次第です。

「日本型環境教育の知恵」という本が今回出版されましたけれど、私が関わった年の1992年「日本型環境教育の提案」の初版が出ました。その後、2000年に改訂版が出たのですが、私はこの中の頁でちょっと語っていることがあります。16年前にやっていたことを8年前に本の中で言ったのです。地域おこしの事例についてなのですが、当時の熊毛町という所で1年に6億円を使ったというお話をしたんですね。構造改善事業という農水省の事業でしたが、どうやって補助金を得たんだ？ということ随分いろいろな人に聞かれました。おそらく行政がやっていることで継続させることは非常に難しい。担当が変わった時点で全て終わってしまうことはよくある。私はそれを見越して、スリーヒルズ・アソシエイツという民間組織を立ち上げました。案の定、担当が変わった瞬間に、行政がやっている仕事は断ち切れになった。まさかこれほど想像が当たるとは思いませんでした。

そこで私は仕事を越えて、自分でこれをやっという決断し、平成5年に川嶋さんと出会って、何とか仕事と環境教育をつなげていこうと、ここに16年通っているわけです。清里ミーティングには随分行政の方がいらしていましたが、少なくなっている。学校の先生もまた少なくなっている、そういう何か風潮、流れがあるみたいですね。その時に私は本の中で、パン作りをするって書いていますよね。その時にはまだ石窯がなかったのですが、家に石窯をつくってパン作りを始めてしまっている。今では、小麦からパン作りもやっている。その時に語ったことを実践しているということ、こんなこと書いてたんだということに、ちょっと驚いています。やると決めて実行したんだと、それを継続してやっているということに、ここ清里に来ていてその価値があったのかなと、改めて感じさせていただきました。

今回のテーマ「日本型環境教育」にはどんなものがあるのか、今、1つの事例で行政が関わる環境教育のことを話しました。皆さんの中で本当に若い人、初参加の人が半分くらいいらっしゃいますが、38歳くらいの方って何人くらいいらっしゃいますか？私が1回目にここに来たのは38歳の時です。今、私は54歳になりました。そのくらい通わせていただいています。是非皆さんもあと

## (社)日本環境教育フォーラム理事 徳永 豊

16年後には、ここに立って何かを語っていただければと思います。所謂ESDではないですけど、継続可能であると、自分がやりたいことをこうしてやってきていてちょっと語れるというのは、ようやくとるな、と今日は自分で自分を褒めさせていただきたいなと思っています。



私の16年間を振り返ると、校長先生がちょっと手伝ってくれたので、学校の現場に入っていきました。学校の土曜日3時間目の授業を1時間担当して、年間16回やったんですね。それで、学校の現場というのはお金を全然持ってなくて、16回やって確か2,000円の図書券をいただきました。そういう時代なんだなと思いました。私は貴重な休みの土曜日に、その授業を5年間やりました。それから自分がやっている小麦作りを子どもたちとしました。それと同時に子どもたちが総合学習に入っていっただけですね。そこで、子どもたちをどう絡めるか。学校にしてみれば、しめしめという感じで「すみません、引き続きお願いします」ということになり、小麦を植えるところから始めてパン作りまで、最後に私の家に来て石窯でパンを焼く、そういうことを継続させてやっています。

何が言いたいかというと、皆さんは「環境教育とは何だ？」ということをそれぞれの地域の中で取り組んでいらっしゃるんですね。これは私の一つの事例にすぎないですけども、その地域特性がある、だから画一的なプログラムではなくて、そこにある脈々とつながっている文化とかを活用しながら、地域性を持たせた特色のあるものでやっていかなければいけないのではないか、と思うのです。私はこの16年間を振り返って、そのように強く今、感じています。

皆さんに確認しますね、来年も清里ミーティングに来るぞ！という方はどれくらいいますか？私は、実は3年計画で生態系についてやると宣言してしまいましたので、来年も間違いなく来なければならない。5年で、10年で、15年で、もういいかな、と思いながら16年来ていますね。恐らく17年になる。実はすごく忙しい仕事を明日抱えているのに、まだここにいるという状態です。

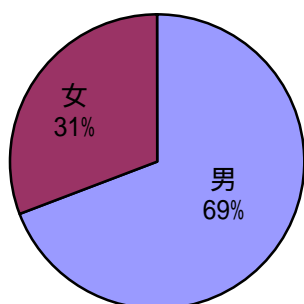
でも、ここに来るには来るだけのお土産がある、ということで、皆さんにも、大きなお土産を持って帰ってほしいなと思います。私の今回のお土産はハリネズミ(ハリネズミの指人形)です。これでパフォーマンスをしてみたいなと思います。

どうぞ皆さんが、この3日間を通して何かお土産をしっかりと持って帰って、来年につなげる活動を頑張ってください。また皆さんとここで会いできればと思います。

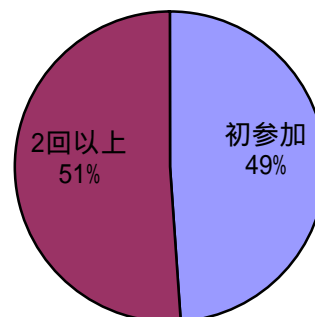
# 参加者データ

## ～ データに見る清里ミーティング 2009 ～

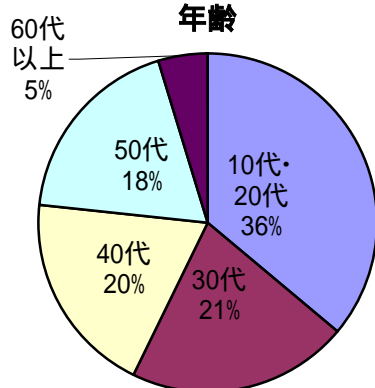
### 性別



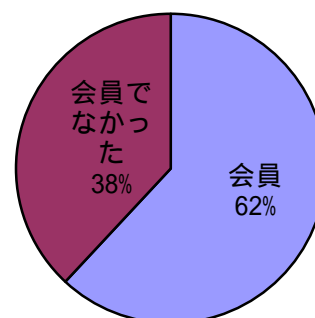
### 参加回数



### 年齢



### JEEF会員比率



### 地域

